
星を射落とす日

砂漠ネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星を射落とす日

【Zコード】

N7980W

【作者名】

砂漠ネコ

【あらすじ】

「一番近くにいるのに、行きずりの女たちの方が君のことを知つてる」

国から追放された主人公エセルと、彼女を守るために国を出た剣士レグルス。

旅の途上、大国サジタリアスに入った二人。立ち寄った交易都市でエセルは突如として攫われる。誘拐犯はレグルスの異母兄シリウスと名乗り、「お前が欲しいと思つたからだ」とのたまうが……。

弓の腕前しか取り柄のない女と、惚れた相手には手を出せない男のファンタジー・ラブコメ。主人公以外の視点を入れるため□付きの回は三人称となります。

「」使いの朝

寄り添つて眠るようになったのはいつからだつたろ？

寝起きの回らない頭でふとそんなことを考えてしまった。
触れ合つた肩越しに伝わる熱をずいぶん前から知つてゐるような
氣もするけど、靈がかつた記憶を搔きまわしても正確な所はよ
く分からぬ。

國にいたころはこんな風に眠ることなどなかつたことは確かなん
だけれども。

まだ青い夜氣が残る早朝、野宿の場所に選んだ巨木の傍らで、い
つものごとく私の方が早く起きた。

旅の相方はたいへん寝起きが悪いので、起こすのは私にとって朝
に必ず待ち受ける厄介事のひとつなのだ。

朝とはいえまだ薄暗いからを起こすのはもう少ししてからがいい
だろう。

寝起きの同行者の凶暴性が身にしみてゐる私はそう判断して、同
じ毛布にぐるまつて寝てゐる奴の顔を改めて観察する。

旅囊を枕にして眠つてゐる男の顔はすぐ間近にある。
吐息が頬にかかるほどの位置だ。

夜を共にした恋人同士みたいな距離と体勢だが、私とこいつの間
に男女関係が発生したことなどただの一度もない。

昔は単なる腐れ縁の同じ部隊に所属する同僚で、今は単なる旅の
同行者だ。

ここに至つては私を女だと認識してゐるかどうかさえ、かなり怪しい。

……それにしても無駄に綺麗な顔だよなー、睫毛で影ができるしわー。

私の隣で眠る無駄に綺麗な顔の持ち主はレグルスという。

旅暮らしが長いため私が適当に切つている金髪は朝の薄い光を反射して蜂蜜色に輝いている。無造作に襟足にかかる長毛の金髪に縁取られた顔は、通つた鼻梁から今は閉じられている瞼、形の良い口腔まで男らしく整つた容貌を作り上げており、端麗な顔立ちと評しても言いすぎではないところが憎らしい。

「…………とつあえず、起きるか」

何だかとも空しくなつて私は毛布からはいで出で、朝の身支度を整えた。

野宿に選んだ場所からすぐの所に綺麗な泉があり、洗面も水分補給も手早く済ませられる。

ひとつでも水質が綺麗なので、水面に自分の顔が映るけどよく見ないでスル。

ああ、まあ女としてあるまじきことだとは分かつやいるけど、田やにとかさえついてなければ後はどうでもいいと思つてしまつ。平凡な容姿をしていることを自覚しているので、先ほど観察した『無駄な美形』顔と比べるとダメージがでかすぎて朝から落ち込むはめになるからだ。

黒に近い焦げ茶色の髪を無造作にくくり、髪と同じ田の色をした可もなく不可もない顔をした女が私だ。観察しても面白くも何ともない。

泉のほとりで、朝の習慣となつている基礎鍛錬を始める。まずは身体をほぐし、手指の感覚を蘇らせる。関節と筋肉が柔軟に、しかも思い通りに動くことが全ての武術の土台だから念入りに行う。

自慢するが私は「矢の使い手だ。

他に取り柄がないともさんざん言われてきたが、国にいた時から弓の腕前だけは天才的だと称賛され続けてきた。

女だてらに弓を扱うには特に筋力の維持に気を使う。男どもは何もしなくてもある程度の筋肉は維持できるし元から力もあるが、女である私の筋肉は運動をしなければすぐ脂肪になってしまいます。腕の筋肉と体勢を支える足腰、そして背筋を鍛える運動は毎日欠かすことはできない。

一通りの基礎鍛錬を終えた後は愛用の弓を使っての稽古だ。

弓筒から赤い矢羽の矢を選び出した。染料で鮮やかな赤に染まつた矢羽は遠くからでも見分けがつきやすい。

私が弓術に魅せられた要因でもあるのだが、長弓を射る動作というものはシンプルにしてひどく美しい。構えて、矢をつがえ、引き、狙いを定め、放つ。

五つの射撃動作の中に全てが含まれ、矢の命中率も威力も射手の技量しだいでどうとでも変化する。弦を引き絞る時も、離す時も左右の手が震えることはあつてはならない。

静かに水中を行く魚のようになめらかに、何の抵抗もなく全ての動作を行うのだ。

呼吸を鎮めて、空に向かつて弓を引き絞る。

放った矢は狙い定めた通りに飛ぶ鳥を射落とした。

うん、いつ見ても惚れ惚れするような弓の腕前だ、私は
まあ誰も見てないけどね。

凶暴な男の起こし方

寝起きが非常に凶暴な男を起こすいい方法があるのなら誰か教えてほしい。

共に旅をし始めてからそろそろ一年にならつかといつのに、私は毎朝びくつきながら試行錯誤している。

今朝の試みとして射たばかりのカモをさばいて適当に木の棒に刺して焼いたものを、空腹の猛獸に差し出すがごとくレグルスの鼻先に近付けてみた。

経験則その一、レグルスは敵の氣配と食い物の匂いには獸並みに敏感である。

案の定、香ばしい匂いのする肉を近づけた途端、奴はかつと皿を開いた。

現れたのは野性味の強いあざやかな緑の瞳。

エメラルドや翡翠に例えるよりも、深い森の生命力をそのまま宿したようだと言つた方がしつくりくる美しいけれども凶暴な色だ。

緑の双眸は寝起きの機嫌の悪さのせいで人間らしさのかけらも宿していない。

その目で焼けた肉を捉えたかと思うと、レグルスはがぶりと肉に食らいついた。

ひいい、やっぱり手でつかむ間もおしんで食らいついたよ、この男。

棒の先に肉を刺しといて良かつたー。

経験則その一、食い物を近づける時は手に噛みつかれないように注意すること。

そう、前回は手で食い物を差し出して、見事に食らいつかれたのだ。歯型が残つたし、かなり痛かった。レグルスの犬歯が無駄に鋭いせいもある、

よし、次回からはこれで行こう。

耳元で起きると長い間叫び続けるのも、ゆすり続けるのも、物理的攻撃をして後で報復されるのも本当に「じつ」だ。

私が心中でこれまでの苦難の日々を回想していると、肉を食い終えてようやく本格的に覚醒したのかレグルスの瞳に人間らしさが出てきた。

寝起きの奴は単なる凶暴な野生動物です。覚醒しなくては言葉も発しませんよ。

「……エセル、お前なあ、もつとマシな起こし方はできないわけか？ あれか？ 僕は闘技場で飼われてる檻に押し込められた腹ペコの獅子か何かか？」

ぐるぐる、と獅子がうなるみたいな重低音の声でレグルスが不平をこぼしゃがりました。

「本当に檻に入っている分、闘技場の獅子の方がまだ安全だねー」
「ほー、じゃあ、お望み通り指一本でも噛みちぎってやろうか」
「やめて、真面目にやめて、弓が引けなくなる」

ひたすら正直な感想をもらしだけだつたのに、つすら寒い殺氣と共に恐ろしいことを言われぶんぶん首を振る。

レグルスは有言実行の男なので本気で怖い。

青くなつた私の顔色を見て気が済んだのか、ふんと鼻をならしてレグルスは睨んでいた目線を私から外した。そして寝起きの猫よろしく伸びをすると、無造作な切り方でも豪奢な金髪をがしがしきながらにやりと笑う。

「安心しりよ、お前の唯一の長所を奪つまねなんぞしねーから

獲りたての美味しい肉が食えなくなるしな、というレグルスの心から本音は朝の爽やかな空気にひどくそぐわなかつた。

追放の理由

なんで私が国を追放されるはめになつたか、話そう。

私の名前はエセル。

パイシーズという国のド田舎で猟師の娘として生まれ、11歳の時に戦争で村が壊滅し孤児となつたので生きるために軍に入つた。この「」時世、珍しくも何ともない生い立ちの人間である。

レグルスとは15歳の時に出会つた。

忘れもしないどしゃ降りの雨のあの日、『街でケンカふっかけてきた元気なガキだよ』と隊長が言つてボロ雑巾のような状態の少年を私に押しつけてきたのだ。

介抱してみるとあんまりに綺麗な金髪と顔をしていたので、呆気に取られたのを覚えている。

それからレグルスはうちの部隊の一員に加わり、華やかで剣技にも長けていたため、あつという間に部隊の中心と目される存在になつた。

私はと言えば、孤児になつて死にかけていた時に隊長の世話をなつたのが縁で隊長の遊撃部隊にいた弓の腕前だけが取り柄の弓兵だつたから、輪の中心にいるレグルスとはそんなに関わることもなかつたように思う。

パイシーズ王国は北方の隣国ジーニーと数十年に及ぶ戦争を続けており、戦をしては小康状態といつも平和が来てまた戦をするという状態だった。

私は隊長にくつづいて戦場に出では敵が気づかない所から矢を射かけ、敵部隊を混乱させるのが主な役割で『夜陰の射手』と蔑まれつつも恐れられていたらしい。

レグルスはその剣の腕と敵を斬り伏せる戦い方の苛烈さで有名となり、隊を任されてもおかしくはない武勲を立てていたが、素行が悪いせいで上層部に目をつけられ相変わらず遊撃部隊の切りこみ要員として戦場を駆けていた。

そんな日々が五年ほど続いた時、隊長が戦闘で命を落とした。残忍にして類まれな馬術の才を持つため自ら騎兵隊を率い戦場に立つジョミニーの兄王ザムエルに斬り殺されたのだ。

その後の記憶は私が混乱していたせいでひどくあいまいだ。

副隊長の命令を無視して単身でザムエルの騎兵隊をつけ狙い、暗殺者のごとく粘り続けた結果、三ヶ月後にザムエルの眉間を射抜いた、らしい。

そんなに時間がたっていたという自覚は全くなかつたけれども、あの男を射殺した瞬間だけはよく覚えている。

まさか自分が殺されることはない、という驚愕に満ちた顔。

眉間に突き刺さる矢の力のまま仰向けに馬上から落ちる瞬間を、確かに私は見た。

その後、栄養失調と疲労で死にかけていた私を味方の兵士が見つけ、バイシーズ軍の陣に連れ帰ったのだと言う。

軍に帰つてすぐは私の扱いは英雄のそれだった。

正直、愛国心のかけらもないでの隊長の仇を討つたということ以外、私は何も考えていなかつたからその扱いにとまどつた。敵国のトップ、双子の王の片割れを殺した私にどんな報償が与えられるかで部隊の連中が盛りあがつていたようだ。

しかし、私に告げられたのは国外追放だった。

いくら軍規違反を犯したとはいえ、総大将の一人を討つた者に重い処罰が下つたことに皆が驚いた。

この処罰にはからくりがあつたのだ。

ザムエルの死に続いて弟王テオドールも死に、政権が代わったことによる一時的な和平が成立したといふことも理由のひとつだ。

けれど最も大きな理由は、ある伝説によるものだった。

『ジヒニーの双王』の片割れを殺したことでふりかかるという災いを回避するために上層部は私を追放することに決めたのだ。

旅の始まり

本当だかどうだかは知らないけれど、王族といつものには不可思議な力を持つらしい。

たとえば私が生まれた国パイシーズの王族は白銀のウロコと鋼鉄の背ビレを持つ巨大な魚に変化し、水を操ることができると。本当にそんなことができるなら、ぜひ戦争で活かしてくれ。

敵船の一つでも沈めてくれ。

何度もそう思ったか分からぬが、パイシーズの王族は王宮から滅多なことでは出てくれることもなく、戦場に立つことなど皆無だった。

だから私ら庶民の兵士はそんな伝説ほとんど信じちゃいなかつたし、伝説の詳しい内容も知らなかつた。

けれど王族を頂点とする国の上層部はそういうふた伝説を『事実』と認識している。

まあそりや、自分自身が巨大な魚に化けることができたりしたら嫌でも事実と分かるだろうから、国王本人は伝説が嘘か本當かを知つて当然だろう。

腹が立つのは自國に都合の悪い伝説を、意図的に庶民には広めないようにしていやがりましたことだ。

お綺麗な大理石で造られた神殿で、笑うしかないことにお偉い大神官サマから私は『事実』を聞かされた。

『敵国ジョニーの王族は双子として生まれたならば一つの命を一つの身体で共有し、不可思議な力を持つ。怪力や互いの間で通じる思

念、そして呪いの力など。双子の片割れが死ねば、数刻後に残つた一人の心臓も動きを止めるが、その間に呪いの術は完成してしまう。……つまり兄王ザムエルを仕留めたおぬしに向けて、弟王テオドルの呪いは既に完成してしまったのだ。このままではパイシーズ全土にまで災いがふりかかるだろ?』

だから、と重々しい声で大神官は続けた。

『おぬしには全ての呪いを背負つて、国から出て行つてもらう』

そうすればパイシーズは呪いを免れる。
本気でそう思つてゐる連中に、反吐が出た。

伝説も呪いも真実か否かなんて私には分かりっこなかつたが、ただ一つ確かなことがあつた。

『ジーハー王族の呪い』を『事実』と認識しているこの連中は、双王のどちらかを殺させたならばその兵士を捨てるなどを初めから決めていたのだ。

それがたまたま私であつたというだけ。

あの最悪の戦場で隊長が殺されるのではなく、隊長がザムエルの首を斬り落としていたとしたら、國から捨てられるのは隊長だったということだ。

隊長は守りたいものがあつて戦つていた。

そんな一兵士の意志も、誇りも、この連中にとって狂信を妨げるざわめきにもなりはしない。

めまいに似た怒りをやり過ごしたあと、私に残つたものは何もな

かつた。

もう何もかもどうでもよかつた。

隊長はもういない。憎い仇ももう殺した。

やるべきことも、戦う理由も、帰る場所も、国も、ない。

麻痺した感覚でとらえた世界はぼやけていて、船に乗せられて見知らぬ土地に放り出されるまでの記憶は自分のものではないようだ。

見知らぬ土地で私の腕をつかんだ、見知った男の声が私を正気に返らせた。

「お前のことは隊長から頼まれてんだ。……だからこんなところで死にそーなツラでふらふらしてんな、馬鹿が。お前が死んだら、密航してきた俺の苦労が水の泡じゃねーか」

これが私とレグルスの旅の始まりだった。

交易都市サテイナにて（前書き）

性的なことに関する発言、またメインヒーローの女性関係に言及する表現があります。苦手な方は「遠慮ください」。

交易都市サディラにて

国境となつてゐる森林地帯をぬけて、大国サジタリアスに入つたのは太陽が真上に差し掛かる頃だつた。

街道に合流し、馬を走らせることしばし。

草原の緑と大海の青に囲まれて、その都市はあつた。

交易都市サディラ。

南大陸に向けて巨大な帆船が出発する港で有名な商業の街である。

*

*

*

宿を取る時に必ず出でてくる質問がいい加減うざい。
だから私は無駄に背の高いレグルスの影に隠れて、無表情でいる。

「おー一人はご夫婦ですか?」

「…………そーだよ」

うわあ、嫌そうな上に投げやりな返事だなあレグルス。
無表情な妻にヤケクソ気味な返答をする夫。

どう見ても離婚寸前の夫婦ぐらいにしか見えない私たちに、宿屋の主人はにこやかな表情で余計な忠告をしてきた。……空氣読めよ。

「寝台が一つの部屋のが、だいぶ安く済みますがねえ、旦那」「やめてくれ、まじでやめれくれ。野宿の連續でほんとくたくたなんだよ。街にいる間ぐらいはゆっくり休みてーんだ」「おおっ！ ジャそつちの淡白そうな奥さんの方が積極的つてえこ

とで……」

「すいません、もう疲れたんで部屋に上がつてもいいですか」

下品な方向に話を持つていきたいらし宿の主人にそう言い捨てて、私はとつと部屋に退散した。

レグルスが仏頂面で「そーだよ」と言つたのにはわけがある。夫婦でもない男女が同じ部屋に泊まるとなると、厄介事がついてまわるからだ。

かといって血縁関係があるようには全く見えないので、兄と妹とか姉と弟とかいった嘘は使えない。使えなさ過ぎて逆に不信感倍増になることを、この旅の間に知った。

「おじこらHセル。お前、自分だけとつと退散しやがつて……あのH口親父に妙な薬売つてる店まで教えられそうになつた俺の苦勞も考える」

「おつかれー。だけどさ、レグルスが誤解招く発言するから、からまれるんだと思うよ。というか、私が『嫌がる夫に無理やり迫る好色女』と誤解されたんだから、謝るべきはむしろレグルスだと思う」「うるせー。『妻の期待に応えられない情けない男』扱いされた俺の方がダメージがでかい」

そう言つて荷を放り出すと、レグルスは寝台の一ついでさつと腰を下ろした。

いつも偉そうに胸を張つているくせに、今は心なしか猫背気味だ。

「ああそうだ。それに関連して質問があるんだけども」

「…………なんか嫌な予感しかしねえ……」

縁の瞳に不信感まるだしの野良猫みたいな光を宿らせて、こちらでぐる。

口元も警戒のためか若干ひきつっているが私は気にしない。

ふと考えてしまってからどうにも頭から離れない疑問を解消したいのだ。

「野宿ではぐつこて寝てるのに、なんで宿屋では一つの寝台を嫌がるの？　というか、いつから傍で寝るようになったんだっけ？」

記憶があいまいで思い出せない、と続けるとレグルスはあんぐりと口を開けた。

そうして次の瞬間には、お前はタコか、と言いたくなるほど顔に血をのぼらせる。

そんなに怒らなくても……。

おーおー怖いねえ、美形の怒り顔は。慣れてるから別に怖くないけど。

「お前は馬鹿か！　いやお前じやが馬鹿だ！　おい馬鹿！」

びしひつ、と指をつけられて思わずハイと返事をしてしまった。

「仮にも女なら少しは危機感知能力を持てよー！」

「……危機？　え？　なにレグルスって私の貞操狙つてたの？」

「…………つ！　んなわけあるか！」

「だよねー」

国にいた時からレグルスは女によくもてた。

軍人に憧れる町娘から城に勤めるメイドさん、商売女はもちろん
果ては貴族のご令嬢にまで熱心な信奉者がいたほどだ。

旅の行く先々でも華やかな美貌と均整のとれた体つきは女性の視
線を一人占め。

おかげで私は色氣のある関係でもないのに、嫉妬をびしょじょと受
けまくっていた。

完全などばつちりだよ。

そんなわけでレグルスは女に不自由などしていない。

時々、色っぽいおねーさんとイイコトしてると私は知っている。
何でだか分からないがレグルスは私にそのことを隠したいらしく、
バレてないと思ってるみたいだがバレバレである。

というか、まあレグルスに抱かれてめるめろになつた彼女らが見
当違ひの攻撃を私にしかけてきたからなのだが。

「レグルスが色気もへつたくれもない私に手を出すなんてありえない
いし」

「…………当たり前だろ」

そんな不機嫌そーな顔で豪華な金髪をかきむしらなくとも……。
誤解なんぞしてないというのに。

「だからさ路銀の節約のためにも、からかわれるネタをなくすため
にも、これからは寝台一つの部屋に」

「断る」

「せまいから? お互い軍隊生活が長かつたし、今さらそんな些細
なことで眠りづらいってこともないで」

「断るって言つてんだろ」

一度も最後まで言わせてもらえなかつたよ。

……まあレグルスにもこだわりがあるのかもしない。

なんかこう、寝台に対する特別なこだわりが。

……なんかやだな。寝台フェチとかだったらどうしようか。

会話はこれで終わひとつばかりにそっぽ向いてフテ寝を始めたレグルスに、溜息をつく。

野宿ではいつの頃から寄り添うようになったのか、結局分からずじまいだ。

∨ s 看板娘 ……いや戦わないけど

一夜明けて、現在。

さつそく宿屋にいづらくなりそうな事態が発生しました。

……やだなあ、もう十口分の宿泊費払つてあるのに。

私たちみたいな流浪の、しかも兵隊崩れだからまともな雰囲気を持つてない旅人は信用されないんで、宿屋の支払いは前払いの上、一括です。

夫婦と偽らないと宿が取れないことなんてザラなのです。偽つてもカタギとは思つてもらえませんが。

「どうしてアンタみたいな冴えない女があの人の妻なワケ？ 分不相応つて言葉、知ってる？」

朝っぱらから私にジエラシーファイトをしかけてきたのは、宿屋の（自称）看板娘でした。

年齢は二十歳にはいっていないだろう。

十七、ハといったところか。

今が句！ の若さによる自信過剰な匂いがむんむんですよ。

勝氣そうなハツキリした顔立ちにていねいに巻いた赤毛、極めつけは大きめのリングをつめたみたいに盛りあがつたバスト。白い清楚なエプロンが窮屈そう。

身体のラインまるわかり。若い娘さんがいいのかそれで？

ヘタしたらここが娼館だと勘違いされるのではなかろうか。

「ちょっと、なによその日。なに気取ってるのか知らないけど、アンタ、邪魔だからとつとと出て行ってくれない？」

「……宿を出でるのは十日後の予定なんですが」

眞面目に答えたのに、すごい日でにらまれた。
昨日からよくにらまれるなー私。

ちつ、と舌打ちしたあと看板娘は急に表情を変えた。
立派な胸をそらし、勝ち誇った表情でふふんと笑う。

「私、知ってるのよ」

何を、と聞くべきなのだろうか。

……いや聞かない方が神経を逆なでしない気がする。

「アンタ、女としてあの人に相手にされてないんでしょ。父さんが
言つてたわ」

あの工口親父に顔が似なくて良かつたですね。

出てきた感想がそれだけなのだが、これも言わない方が賢明だろう。

う。

そう判断しただけだつたのに看板娘はなにかリアクションが欲しきらしく、イライラし始めた。

あ、さつき食べたベーコンが奥歯にひつかつてら。

……塩味がきつすぎたなあ、こここの朝食。

ちなみに朝食は一人で食べましたよ。

ええ、必要ない限りレグルスを起こす努力なんぞしません。

奴は絶賛、爆睡中のはず。

別のことを考へてゐるのがばれたのか、看板娘が爆発した。

「すましてるんじゃないわよ！ 昨夜だつてベッドがきしみもしなかつたくせに！」

聞き耳を立てていたんですね、分かります。
レグルスの美形顔に一目惚れして気になつて気になつてしかたなかつたんですね。
……こういうのも職権乱用と言うのだろうか。

「ええまあ、二人とも爆睡してましたからね」

旅は体力を使う。当然のことだ。
きちんとした寝台で眠るなんて久しぶりのことで、私もレグルスも夕方からダウンしていた。

別々の寝台じゃなくても気持ち良くなれて爆睡できたとは思うが。

「そうでしょそうでしょ。あーんな素敵な人がアンタ相手にヤル気になるわけないじゃない。だ・か・ら・賞味期限切れの妻に代わって、あたしがあの人を癒してあげるって言つてるの。だから、出でけつての」

いえ初耳ですが。

まあこの看板娘からは初耳だが、似たようなセリフは言われ慣れている。

ならば対処法は一つ。

「そうですか。じゃ、『じゅづくづ』

「どうしても出てかなーって言つなら……って、え？」

「ですから、『ゆつくり。私は口が暮れるまで宿には戻りませんか

』」

「どうぞどうぞ、と廊下の端による。

もう出かけたところだったのだ。

ジーラシーファイトをしかけるまでもないのに、好戦的なお年頃なのだろう。

夜這いならぬ朝這いに（偽称）妻のお墨付きを得て、看板娘は目を白黒させている。

「あ、それからレグルスは寝起きが最悪に凶暴なので噛みつかれないように注意した方がいいですよ。押し倒されたら従順でいるのが快樂への道らしいです」

「一つぞやの街であでやかな夜の蝶である美女がとうとう語りてくれた情報だ。

レグルスの寝起きが凶悪なのはよく知っているが、どんなに寝ぼけていてもレグルスが私を押し倒すことはないので後半はどうしても伝聞になる。

一番近くにいるのに、行きずりの女たちの方がレグルスをより知っているのだ。

そう思つと胸がちりちりと焦げ付くのを、気づかないふりをする。

呆気に取られた看板娘に手をふつて、私は宿屋を後にした。

賭け事は計画的に（前書き）

評価・お気に入り登録ありがとうございます！

今回、距離の単位が出てきます。

一メテイル＝約一メートルとしてイメージしてください。

賭け事は計画的に

なんといふか、いい買い物をした。

うーん、さすがサジタリアス。良い品がそろつている。
弓術を奨励している国なだけあって、腕のいい弓職人を優遇して
いるのだろう。

どうにもボロかった矢筒を新調できて大満足だ。
よくなめしてある赤茶色の肩掛けベルトの具合を確かめながら、
にぎやかな大通りを歩く。

くうう、この肩に対する負荷を最小限に抑える職人技がにくい！
財布がだいぶ寂しくなったけどそれでも悔いはないよ！
弓使いが道具をケチっては話にならない。
安物買いは結局、金をドブに捨てていることと同じなのだ。

ここは港にいたるゆるやかな下り坂。
幅の広い石畳の大通りには数えきれないほど露店がひしめきあ
つていて。

「おうおう、そこの上機嫌なねえちゃん！ どうだい、おひとつー。
今が揚げたてだぜ！」

食欲をそそる油の匂いに顔を向ける。

露店のおっちゃんよりも荒波にもまれて大漁だーとか言うのが似
合いそうな巨漢が、魚の揚げ物をパンにはさんでいる所だった。

……そんなはたから見て分かるほど上機嫌だったのか、私。

表情がローテンションすぎて分かりにくいと国では大好評だったのに。

主にネガティブな方向には感情の針がよく振れているんですがね。どうにも恥ずかしかったので揚げ魚入りパンを一つ買つと、そくさと立ち去る。

……あ、うまい。香ばしいハーブと白身魚のうまみのハーモニーだ。

昼飯を済ませつつ、大通りをぶらついていると人だかりが目に入つた。

もしや噂のアレだらうか？

食べ終わったパンの包みを懷にしまって、私は人垣の中に入つた。

* * *

大国サジタリアスは国を挙げて弓術を奨励している。
それは他国にまで鳴り響くほど、確かなことだった。

なんでも建国神話が影響しているらしいのだが私はよく知らない。意外とそういう神話や國々の事情に詳しいレグルスから聞きかじった情報である。

レグルス曰く、偉ぶった貴族連中からそこらへんにいる鼻たれ小僧まで、とにかく弓の腕を磨けとお国から圧力かけられるらしい。

どうもその情報は正しいっぽい。

「こんな街中に『』の練習場がいきなりあるぐらいだ。

人垣を割つて大通りの角をひとつ曲がるとかなり広い空き地にながつており、昼下がりのこの時間、お祭り騒ぎの真っ最中だった。

端的に言つと、賭け事。

ギャンブルは男のロマンとは軍にいたころ同僚たちがよく言い訳がましく言つていたセリフだが、ここにいるのも圧倒的に男が多くた。

むさいむさい！……まあ軍隊生活で耐性あるけどや。

「さあさあ！　お次は誰が挑戦だい？　あの毒サソリの心臓を射抜けば銀貨十枚だよ！」

賭けの元締めらしい男が威勢よく声をはりあげている。
広場の突き当たりとなる建物の壁際に、いくつかの的が用意されていた。

パイシーズでもよく見た中心を黒に塗つた円い的もあれば、見たこともないようなものもある。大きさもまちまちだったけれど、黒いサソリが描かれた的は断トツに小さかつた。

的 자체がスズメほどの大さだらうか。

五十メティルほど先にある黒サソリの心臓は、かなり田の良い人間でないと視認することも難しいだらう。

……でもぶつちゃけ簡単だよな。動かない的なんて。
狩りや戦いに比べれば、子どもの遊びみたいだ。

それで銀貨十枚とは、なんてぼろもつけ。

一か月分の宿代になる。

ちょうど懐具合も寂しいし、ここはひとつ、やってみるか。

手をあげた挑戦者が女だつたことに賭けに興じてゐる見物客たちの間で、驚きと悔りのざわめきが広がつた。

この分だと『私が的を射抜く』に賭ける密は少なそうだ。

けつ、馬鹿にしてる。ぱーかぱーか。

ふだんとことんネガティブな私でも、弓の腕前だけは自慢なんだからな！

……むなしいなー。

『』に弦をはつて立ち上がつた瞬間、酔っ払いのでかい声が聞こえた。

「どうせ女が挑戦すんなら、もつと美人な色つぺえ姉ちゃんなら』『当たり』に賭けんのになあ」

「はは、違ひねえや」

よくある嘲りの一つを耳が拾つてしまつたのは何でだろう。いつもなら『』を構えた瞬間から無心になれるのに。

『アンタ、女としてあの人相手にされてないんでしょ

宿屋の看板娘の言葉が耳に蘇る。
レグルスはあの娘を抱いたどうつか。

……余計なことを考えちゃ駄目だ。
というか抱いたからって何なんだ。いつものことだ。
レグルスが誰を抱こうが関係ない。そばにいてくれるなら、私は
それでいい。

抜け殻だった私を探し出して、腕をつかんでくれた。

あの熱を覚えている。

私を生かしてくれた熱を。

あの大きな手のひらで、固い剣だこのある指で行きずりの女の肌
に触れたとしても、私のそばにいてくれる。

「それだけで、十分じゃないか」

何度も出したことのある答えをつぶやく。

強くなってきた潮風にまぎれて誰の耳にも届かなかつただろう。

指先はもう震えていない。

大丈夫。視界もクリアだ。風向きも考慮にいれた。

さあ、毒サソリの心臓を射抜こう。

矢をつがえ、耳の後ろまで弓を引き、放つ。

放たれた矢は吸い込まれるように心臓の真ん中に突き刺さった。

*

*

*

まったく、とんだ騒ぎだつた……。

私^わが的を外すことに賭けていた大部分の客が暴れ始めるわ、『当たり』に賭けたものすごい少数派が狂喜乱舞するわ……正直、思い出したいくない。

銀貨を受け取つて、ダッシュで逃げだしましたよ、ええ。

「(汗)まで来れば、もう大丈夫かな」

土地勘のない街でだいぶ走り回つたので、現在地が分からん。なんかでかい屋敷が立ち並んでいて、やけに静かな感じです。

「とりあえず、メインの大通りに戻つ……」

突然、口をふさがれ、身体が宙に浮いた。

とつさにもがくが背後からまわされた頑丈な腕はびくともしない。軍隊にいたから断言できる。これは鍛えられた軍人の腕だ。

なめんな、こちとら兵士だつたんだ！

口をふさぐ手に噛みつこうとすると手は離れたが、叫ぶ間もなく首筋に衝撃が走つた。

これは……覚えがある。あれだ、隊長の得意技だつた……手刀……。

あちゃあ、だめだ……レグルスが……怒る……。

『この馬鹿が、少しばかり警戒心養えよ』といつ説教の幻聴を聞きながら私の意識は薄れていった。

誘拐犯は狼系

鼓膜を震わせる男の声に、意識が浮上する。

重く深く、耳に心地よく響く、まあぶつちやけ良い声だ。

……レグルス？

なわけはない。

首筋に感じるじんじんとした痛みが、私に現在の状況を思い出させてくれる。

ああ、そつか。気絶させられて、どつかに連れて来られたってことか、私。

……なまつてたのかなあ。

レグルスが小つるさく言つてへくる警戒心うんぬんの話はともかく、口クな反撃もできないまま氣絶させられるとは思わなかつた。

仮にも兵士だった者として、かなり恥だ。

「……が……の手配を……」と王宮への連絡を任せろ。ああそれから、期待はしていながら捕らえた連中への尋問はびつになつた？」

何やら頬に指示を出していたらしい男前ボイスが途切れ、別の声

がきびきびと返答をした。

「はっ！ やはり海賊は單なる隠れ蓑だつたよつです。スコルピオ
ンの手の者は一人もおりませんでした」

「毒サソリは単体で動くからな……。まあいい。『宝』がこひらひ
戻ってきた以上、もう一度奪いに来るだひつ」

「では増員の兵を領主から借り受けでは……」

「陛下の望みは『迅速に、かつ内密に』だ。『宝』の奪還が果たさ
れた今、信用に値しない兵を入れる利はない」

「はっ！ 申し訳ありません！ 浅慮なことを申しました」

どう聞いても上品と鄙びの会話だ。

軍にいた頃はこんな会話もよく聞いたな、と場違いにも少しなつ
かしくなつた。

首の痛みをこじらせて、そろそろと薄田を開ける。

そこには随分と高級そうな部屋だつた。

レリーフを施された白い柱に、重厚な臙脂色のカーテンの対比が
いかにも金持ち的な美を主張している。

歩いたらフカフカしてそうな毛足の長い絨毯。

部屋に明りを提供している花の形をしたランプも、それが置かれ
た猫足テーブルも、とにかく全ての調度品が無駄にきらきらしい。

見たことなんてもちろんないが、貴族の館とはこんな感じなのかも
しれない。

とりあえず、私が後ろ手に縛られて転がされているのは金糸で蔓草

が織られたベッドカバーの上だ。

……やばい、ヨダレとか垂らしてたらビリijoよつ。
めちゃくちや高価そつなんですけどー！

ベッドの上から見る限り、この部屋に人はいない。
声は部屋の奥、わずかに開いたドアの隙間から聞こえている
らしい。

……ここが一間続きの高級宿屋とかであることを祈りう。
もしホントに貴族の館だつたりしたら、シャレにならん。いや真
剣に。

「！」苦労だった。下がれ
「はっ！」

レグルスに似た男前ボイスが、声質に似合つ尊大な口調で言うと
(推定) 部下が部屋を出て行つたようだ。

ひかえめに閉じられたドアの音。

それに続いて(推定) 上官殿の気配が少しだけに近付いてくる。

え、ちょ、来ないで欲しいんですけど。

何でとつ捕まえたのかは知らんけど、捕虜への尋問は偉い人の仕
事じゃないだろ！

つか、さつきも何かの尋問は部下任せだった発言してたじやない
か！

逃げたくても、手だけじゃなく足も「」寧に縛られてるから、芋
虫の「」とくはうことしかできないんですよ。

軍隊生活長かつたですが、捕虜になつた経験はないので対処方法なんて知りません。

「どうか本当に何で私を捕まえたんだよ！」

あれが、ジエミニーの王の片割れを射殺してパイシーズから追放された『夜陰の射手』だからか！

理由なんてそれしか思いつかないけど、大陸の西端と東端ほど距離のあるサジタリアスは別にどっちの国とも利害関係なんてなかつたはずだぞ！

私の心の叫びも空しく、一人の男が部屋に入つて來た。

第一印象は、とにかく美形。

ああ、こいつもレグルスと同じく女にもててもてて仕方がないんだろうな。

真冬の夜空みたいに冷たいのに、燃えているようなブルーの瞳。綺麗な銀色の髪は襟足のところで一つにくくられている。

……そういえばサジタリアスの貴族は男でも髪を伸ばすことが常識だとかなんだとか、レグルスが言つてたような……。

うわ、嫌な方向に予想が大当たりですか！

鍛えられた鋼のような体つきの銀髪軍人はベッドの傍でぴたりと足をとめた。

ただ立つているだけで無駄にサマになる男だ。

「起きたか。お前の名は何と言つ？」

捕虜に対する尋問にしては語調が柔らかいと思つのは氣のせいだらうか。

いや、さつきの部下に対する声より明らかに優しいような……？
例えるなら、さつきが狩猟犬に向けて指示を出す主の声なら、今は愛玩犬に話しかけてる甘いご主人様の声だ。

変だ。

この怜俐な美貌、といつ言葉がしつくづくる男が何を考えているのか全く読めない。

「……ああ、すまない。」こちらから名乗った方が良かつたな。俺の名はシリウスだ。シリウス・ボレアリス。北部に領地を持つボレアリス家の次男で、サジタリアス現国王陛下に剣を捧げ、仕えている

ええと、そんなど丁寧に自己紹介されても……どうリアクションしろというのか。

氣絶させられて拉致られて、縛られてる女に礼儀正しい自己紹介するか普通。

普通しないよ！

行動に整合性がなさすぎて怖いんですけどー

「ええと……あの、何で私を連れてきたんですかね……？」

拉致つたとは言わない。怖いから。

銀髪男……シリウスはその問いに笑みを浮かべた。

あ、間違つた。こいつは犬のご主人様なんかじやない。
群れを従える絶対的な力を持つた、狼。

そんな凶暴な笑みだ。

鋭い犬歯が見える笑みの浮かべ方は、レグルスにひどく似ている。

「お前が欲しいと思つたからだ」

……弓使いとして、だよな？

あの的当てをどつかから見てたのだろう。

「……仕官のお誘いなら普通に話しかけてくれれば……」

「違う。俺は狙つた獲物は絶対に逃がさない主義だが、今は任務中だ。口説く時間がないからこいつして無理やり連れてきた」

あ、無理に連れてきた自覚はあつたのか。
そこから話が通じないのかと思つてたよ。

……というか、何か今、理解不能な言葉が混じっていた気がする
んだが……。

「それよりお前の名を教える」

「あ、エセルです」

反射的に答えてしまつ。混乱しそぎて頭が働いてない。

「そうか、エセル。もう一つお前に尋ねたいことがある

狼っぽい笑みを浮かべながらシリウスがベッドに手をついた。

そうして本当に狼とか犬とかがよくやるようにな無造作に私の首筋をなめたのだ。

ひいいいいい！！

ちょ、くすぐったい！ まじでやめりー やめてください首弱い
んだからなー！

「なぜレグルスの匂いがお前にしみついているんだ？ お前はあれ
の女なのか？」

首筋に『えられた感触にじたじたする私を押さえつけ、にらん
でくる。

「こんな時でも美しさと思いつてしまつ青の田は、色いろ違えど……。

「……っ、れ、レグルスを、知つて、るんですか？」

「あれは俺の愚弟だ」

声も、笑い方も、にらみつけてくる眼差しの強さもレグルスに似
た男はそう言った。

誘拐犯は狼系（後書き）

お気に入り登録50件越え！ 本当にありがとうございます！ 読んでくださる方全員に心から感謝しています！

ですが大変申し訳ないことに、これから作者の生活上の都合により更新ペースが遅くなります。
可能な限りアップしたいと思っておりますが、10月の半ばまで立て込んでいます……。

どうか温かい田で、ラブコメなエンディングにたどりつづくまでお待ちくださいと幸いです。

自己申告では犬系

自分よりも大きな生き物に押さえつけられる感覚は捕食される瞬間の鹿やウサギと同じなのではないだろうか。

逃げられないという絶望感と、これから食われる内臓が上げる悲鳴。

命を握っているのはいつだって強者で、弱者は悲鳴を上げるか涙をこらえるかくらいの選択肢しかない。

のしかかられた瞬間に蘇つた記憶がある。

あれはジェミニーとの戦況が厳しさを増してきた頃だから、19歳の時だ。

私たちの遊撃隊に与えられた任務は敵陣の様子を探ること。ジェミニー軍が平野にはった陣からかなり離れた山小屋を拠点にして、見つかりにくいよう散開し情報収集を行っていた。

私は拠点に詰め、皆が持ち帰つて来た情報を整理する役。ほとんど山と同化しているような朽ちた木の匂いのする山小屋で仲間の帰りを待っていた。

たぶん、ものすごく運が悪かったのだろう。

ジェミニー軍からの脱走兵がその山小屋を見つけたのだ。

金欲しさに軍に入つたはいいが、戦闘で命が惜しくなったクチだろう。街の「ロツキ」といった雰囲気の五人の男たちは私を見るなり下卑た笑いを浮かべた。

弓以外の武器は人並み以下の腕前の私はあつという間に抑えこまれ、さすくれ立つた木の床に組み伏せられた。

もがけば殴られて口の中に血の味が広がったのを覚えている。

けれど次の瞬間に血を噴き出していたのは私を押さえつけていた男の方だった。

男の腕を斬り飛ばしたのはいつの間にか戻ってきていたレグルスで、その目は緑色の炎みたいに獰猛に燃え盛っていた。

助けが来る見込がない分、銀髪の偉そうな軍人に押し倒されいる今の状況の方がヤバいのかもしれない。

なんせ縄で縛られてるし。

それでも、その男が言ったことが衝撃的すぎて、蘇つてきていた記憶の光景も現在の状況も一瞬にして吹っ飛んだ。

* * *

ぐてい。

ぐていぐていぐてい……ぐて、偶蹄？

いや、愚弟だ。

愚弟ってなんだっけ？

自分の弟のことをへりくだつて言つ言葉だったよくな。

あれだ。実は全然そう思つてないのに「ふつつかな娘ですが……とか言つて嫁に出すのと同じ感じの語句だつた気がする！

というか、

「レグルスがあなたの弟！？」

「そうだ。もつとも、異母兄弟だがな」

「じゃあ、あなたが正妻の子で、レグルスがお婆さんの子とかそう

「う……」

「それは違う」

意外なことにシリウスは律義に質問に答えようとする。私の困惑氣味にひきつった頬を長い指でなでながら、何やら思案しているようだ。

……いやいや、なでるなでるな！

首弱いって言つただろうが！ 心の叫びで！

首筋に近いところも眞面目に無理だから！

嫌なんで首をふつて逃れよつとしたら、あつさり顎を捕らえられた。睫毛が振れそうな至近距離からのぞきこまれる。

「そうだな……俺とレグルスの父親のことから説明した方が分かりやすい。俺たちの父親は18人の女を孕ませて、21人の子どもを作つた男だが」

なんかいきなりとんでもない話が出てきたよ。

「親父殿は女を籠絡するのが上手かつたらしい。現に俺の母であるボレアリス家の当主が奴を悪く言うのを聞いたことがない。そしてレグルスの母親はリー・オーの王族だった」

リー・オー。

獅子の治める国。

私でも知っている南大陸の大国の名だ。

え……ちょっと待て。

話がなにかとんでもない方向に進んでいくんですけど。
いや、それ以上に……。

「レグルスの母親は王家を出奔した身だつた。リ オ から遠く離れた森に隠れ住んでいたところを親父殿が見つけて口説いたらしい。レグルスが生まれた後もしばらくは平穏だつたようだが、どうも王家がらみの陰謀で母親が殺され、レグルスは親父殿に手を引かれてボレアリス家にあずけられた。……俺が九つで、あれが五つかそらだつたな。警戒心の強い野良猫そのものの鋭い目つきをしていたのを覚えていい。それからあのが13の時にボレアリス家を飛び出すまで共に育つた」

私の頭はいつも許容できる範囲をこえると、ぼんやりする。「この霞がかつたアホな思考でも理解できる」とは一つだけ。

この話を、レグルスの口から以外で知るべきではなかつた。

レグルスは、私を許すだろうか。

「さて」

偉そうな軍人らしい落ちつき払つた声が降つてくる。
ベッドに私を押さえつけたままの体勢で、銀髪の男はゆつたりと確認した。

「質問は以上だな？」

「どうか、今まで私の質問タイムだったのか。

これ以上、レグルスの過去を探るのはいくらなんでも反則すぎる。聞いてしまった情報だけでも知りすぎてしまつたぐらいだ。

私はのろのろと首を横にふつた。

「では、今度は俺の質問に答えてもらひ。……もう一度聞くぞ、お前はレグルスの女なのか？」

「違います」

宿屋のチックインでは夫婦と偽つてはいるがレグルスと私の間に甘いものはひとカケラもない。あるのは腐れ縁と……レグルスにとっては義務感だけだろう。隊長に頼まれたことへの

「ではなぜレグルスの匂いがこのようこしみついている？　かなりの数の夜を共に過ごさねばこいつはなるまい」

野宿では寄り添つて寝てるけど。

かなりの数の夜を共に過ごしててるけど。

なんというかあれはお互い暖を取つてゐるだけといふか。いつから傍でひつついで野宿してゐるか覚えてないけど、もう習慣といふか。

いや、それよりも何でそんなことが分かるんだよ。犬じやあるまいし。

レグルスの名前とか過去とかがいきなり出てきて動搖してたけど、根本的な疑問によつやくたどり着いたよ。

「……匂いでレグルスが分かるんですか？」

「当然だ。俺は『オオイヌ』だからな」

当然だとかそんな偉そうに言われましても、さっぱり意味が分からぬ。

オオイヌってなんですか。犬の種類ですか。

「……犬なんですか？」

「ああ。だからこそ陛下の『宝』を毒サソリの手から奪還する任を与えられ、交易都市サディラにたどり着いた。そうしてお前を見かけて、欲しいと直感したので任務中に不謹慎だとは思つたが捕まえたのだ」

「いやいやいやいや、そこは真面目に任務こなしましょー！」

うつかりノリツッパリしてしまつ。初対面の男なのに。

あれか、ツツコミビニが多いのはレグルスの兄弟だからなのか！？

奴も方向性は多少違うが偉そうでツツコミビニが多いんだよ！

シリウスはさも心外そうに硬質な青の瞳を見開いて、首をほんの少し傾けた。

憎らしいほどにサラサラした長い銀髪が私の頬にこぼれかかる。

「任務はもうひとこなしている。陛下の『宝』も既に奪還した」

真上から私を見降ろし続けていた瞳が逸れ、部屋の一角を指し示す。

横目に確認してみると木目も美しいテーブルの上に「これぞ宝箱！」という自己主張も甚だしい箱が鎮座していた。

うわあ、分かりやすい。

あの埋め込まれてる宝石、サファイアとヒメラルドじゃないですかね。名前しか知らないけど。

装飾過多な『ザ・宝箱』に呆れないと、慌ただしくドアが叩かれた。

「シリウス様！ ディールとジルクの班が襲撃を受けました！ 毒サソリの手口と思われます！」

「かかったか。すぐ行く」

部下の切迫した声に、シリウスは訓練された軍人にふさわしい素早い所作で私の上から退いた。

……押さえつけられてないって素晴らしい。

しかし私が解放感を味わいつつ、肩と腕のしびれをほぐしているといつのにシリウスは空氣を読まなかつた。

ガシヨン

なぜか間抜けに響く金属音と共に、一瞬で首になにかがはめられた。

いや、分かつてゐる。

分かつちゃつたから、分かりたくないんだよ！

「念のためだ。動きまわられるのは困るからな。……では行つてくれる。大人しく待つていろ」

非常識なまでに勝手なことだけのたまつて、シリウスは寝室を出

て行つた。

誰が待つか！

というかご丁寧に縛った上に、鎖付きの首輪までつけるなよ！
自分は犬だつて言つたのはお前だろ！

犬は首輪をつけません。つけられる側だから！

私の心の叫びでシリウスが呪われることをひたすら祈つた。

【八年振りの再会】（前書き）

戦闘シーンと流血描写があります。
苦手な方はご注意ください。

【八年振りの再会】

ひどい苛立ちを押し殺しながらレグルスは夜闇に沈んだ街を駆けまわっていた。たとえ一晩中走り続けたとしてもへばるような体力はしていないが、自分のしていることのあまりの効率の悪さに彼は舌打ちする。

人の多い酒場などで『長』を背負つた焦げ茶色の髪の女を見かけなかつたかと聞きまわり、ようやく得られた情報は「『暁過ぎ』じろ的當て場で今まで誰も射抜けたことのない『毒サソリの心臓』に見事命中させた女がいた」ということだけ。しかも肝心のその女は賭け事が終わるや否や、賞金をつかんでとつと姿をくらませたという。

「……シリウスの奴なら、こんな時間食つまでもなく見つけられるのにな……くそッ！」

この国にいる異母兄ならば、造作もないことだ。

いや、それよりもレグルスが忌々しいと思つのは自分の能力がとんだ『できそこない』だということだった。……彼の身に流れる血に反して。

幼い頃から慣れ親しんだ、自分に対する苛立ちの感情。

だが今は苛立ちを感じる時間さえ惜しい。

嫌な予感がするのだ。……とてもなく嫌な感じのぞひつくよつな予感が。

レグルスは己の経験上、嫌な予感『だけ』は外さないと確信して

いた。

（だいだい、あの時もそうだ。嫌な予感がして引き返してみれば、あの百回ぶつ殺しても足りねえぐらい忌々しいジョニーの脱走兵どもが……）

エセルを山小屋の床に押さえつけ服を裂こうとしていた男を見た瞬間、全身の血が沸騰したこと今まで覚えている。

思い出せば今もなお炎を放つ怒りが、レグルスのまとう雰囲気をひどく凶悪なものにさせた。運の悪い酔っ払いがレグルスにぶつかりそうになり、視線があつただけで「ひい」と氣絶したほどである。

レグルスは勘を頼りに走っていた。

正確には「嫌な予感がはつきりと感じ取れるような方角へ」だ。それはひどく曖昧な感覚だつたけれども、情報が尽きた以上、これしか頼るものはない。

潮の匂いが濃い霧を作る船の墓場のような真夜中の波止場で、嫌な予感は確信に変わった。むつとする潮風に紛れ込む血臭と死臭。レグルスにとって長く身を置いていた空気が漂っていた。

月明かりしか照らし出すもののない船着き場は、今や血なまぐさい戦いの舞台だったのである。舞台には既に事切れた者が数人倒れ伏し、否応なく死の気配を蔓延させている。鋭い剣戟が鳴り響く中、舞台の主役として剣を振るうのは……レグルスにとっていくら月日がたとうとも見間違えるはずのない男だつた。

「よりもよつて、なんでお前がここにいたんだよ…………シリウス」

苦々しい声は波音に呑まれて消えた。

*

*

*

シリウスの剣技は圧倒の一言に尽きた。

まだ動いている敵は三人。

いずれも暗色の装束に身を包み、猿のようなど形容するしかない人間離れした動きを見せる。ある者は四肢を使って跳躍し、別の者は停泊した船の側面を走り、巧みにシリウスを包囲しようとする。明らかに暗殺という特殊技能に熟練した者たちの動きだった。

対するシリウスはそれを迎え撃つだけだ。

そう、それで全てが決する。

同時に、前方から、背後から、そして頭上から繰り出される刃をかわす素振りすら見せない。

ただ流れるような動きで己を中心として剣を閃かせた。

夜空を裂く青白い流星の軌跡のことく、美しい斬撃。

しかしその美しさと対比するよつて、それがもたらしたものは凄惨だった。

三人の暗殺者はみな剣ごと身体を両断され、六個の『物体』に成り下がったのだ。あまりに鋭すぎる斬撃の影響なのか、一拍遅れて血しぶきが上がる。

血の花が咲く中心にいたといつのにシリウスはもう場所を移して いた。返り血ひとつ浴びずにあるで最初から気づいていたといふ顔で、レグルスに近付いてくる。

(……どんだけ腕を上げりや気が済むんだよ、ここには……)

レグルスは歯噛みする。

8年前、レグルスがボレアリス家を飛び出した頃すでにシリウスは剣聖と呼ばれていた。たった17歳の少年が、である。
剣技においても、血に宿る特殊な力においても、人を従える能力においても何ひとつ、レグルスがシリウスに勝てると思えたものはなかつた。むろんレグルスは生来の負けず嫌いだったから四歳という年齢差を考慮していなかつたという見方もあるのだが……それでも隔たりが大きすぎた。

自尊心が腐り落ちる前に息ができる場所へ逃れたいと願つたことが、サジタリアスを出る一因となつたくらいには。

先に口を開いたのはシリウスだつた。
レグルスの記憶にあるのと寸分違わない偉そうな口調の、低い声
が響く。

「久しいな、愚弟。野良猫暮らしに飽いて戻つて來たか」「
「んなワケあるか。……それに俺が戻る場所はボレアリス家じゃねえ。あの家と俺はもう縁切れたはずだろ」
「母上はお前を気に入つてゐるからな。養子縁組を解消したという事実はない。だからお前が嫁を連れて戻つてきて分家を増やそうが、構いはしないはずだつたのだが……」

ぞわり、と首筋に違和感が走る。
存在しないタテガミが逆撫でされているような気分にレグルスは悪態をついた。

嫌な予感の根源はこれだつたのか、と。

「エセルというあの女は俺のものにする。お前の嫁だらうが何だろ
うが知つたことではない」

「ふざけんな」

「俺は冗談など言わない。忘れたのか?」

忘れるわけがない。この異母兄はいつだって本氣で、だからこそ一番性質が悪いことをレグルスは骨身にしみて知つていた。

「……アイツを、どこへやつた」

「相変わらず能力を得ることはできないままか。仮にも天の獅子の血を引くといふのに、嘆かわしいことだな」

その言葉はレグルスの中でくすぶつっていた炎を容易く爆発させた。シリウスにしてみれば事実を口にしたまでのことで、挑発ですらないと分かつてはいたが、レグルスの苛烈な精神には十分な起爆剤となつたのだ。

「……っ、うるせえよ!」

唸るように吼えて、レグルスは剣を抜き放った。

剣を鞘走らせる勢いそのままに一瞬で間合いを詰め、下段から鋭い斬撃を繰り出す。

常人ならばあまりの迅さに刃の煌めきを捉えることもできず、喉笛をかき斬られていたらどうが、シリウスは最小限の動きでその一撃を受け止めた。

交錯した二つの剣が火花を散らす。

両者とも引かずそのまま鎧迫り合いとなつた至近距離で、シリウスが表情も変えぬままつぶやいた。

「太刀筋はだいぶマシになつたと褒めてもいい。……だが、俺には

敵わん」

「ほざいてる。 アイツに手え出す『氣なら今ここでぶつ殺してやる』
「俺を殺すには百年ほど修行が足りないのでないのではないか？」

絶妙と言つしかない呼吸で斬り結んでいた刃を離し、シリウスは
新たな斬撃を振るつた。研ぎ澄まされた剣がレグルスの首を薙がん
とする軌跡を描く。

間一髪、飛び退つて事なきを得たものの、レグルスの背に冷たい
汗が流れた。

金色の髪がひと房切られ、はらはらと空間に散る。
この一撃を避けられたのはパイシーズでの軍時代に隊長から鬼の
ような訓練を受けた賜物だろう。でなければ確実に首が落ちていた。

「剣を引け。 流石にお前を殺すのは寝覚めが悪い」

「今さらそれを言うのかよ」

「俺も驚いた。殺し合いができるほどお前が腕を上げたのか、俺の
心の持ち様なのか……どうにも手加減が上手くできないようだ」

「とにかく野郎だな……」

悪態をつきつつもレグルスは攻めあぐねていた。

シリウスに隙はない。そしてシリウスに打ち勝つ可能性を見出す
こともできなかつたからだ。

鮮やかな縁の瞳で異母兄をにらみつけている、レグルスの耳は
近づいてくる足音を拾つた。剣を構えたまま、横目に確認すれば駆
けてきたのは6人ほどの男たちだ。町人の服を着てはいるが、雰囲
気からして訓練された軍人と分かる。

「シリウス様！ その男は……？」

「手出しが無用。」これは俺の愚弟だ。……それよりも負傷者の安否を報告しろ」「ひい

シリウスの言葉に驚きの声をもらしていた部下たちだが、それでも背筋を伸ばし声を張り上げる。

「『』命令通り負傷者の救護は完了いたしました！ 重傷者3名。残りの6名は命に別状はないということです！」

「そうか……。では下がれ。毒サソリの始末は完了した」

「ですが…………」

「下がれと言つていゐ」

部下たちの困惑にもシリウスは頓着しない。冷静な顔でレグルスと対峙していたのだが、次の瞬間、突然眉をひそめた。

風の匂いを嗅ぐように首を巡らせるべく、街の方へ顔を向ける。

「……神器が、開いたのか？ 地下の『宝』の匂いが……」

シリウスの行動は迅速だった。

あっさりと剣を鞘に納めると街へ向かつて駆けだしたのだ。まるで部下への指示を出す間も惜しいといつ急ぎぶりに、誰もが唖然とした。

その状態からいち早く我に返つたのはレグルスである。

「つてオイ！ どこまで勝手なんだお前は！ つーかエセルをどこにやつた！」「

本気で嫌なことに異母兄の傍若無人っぷりに磨きがかかっていることを確信しつつ、レグルスはその背を追いかけて走りだした。

王様のお宝

故郷を追い出される時にお偉い大神官サマから授かりました知識に『念話』に関するものがあった。

どうも離れた場所にいる一人が脳内会話できるらしい。

ジョミニーの双子の王族に使い手が多く、私が殺した兄王ザムエルは念話で弟王テオドールに「俺殺したのこの女だから呪つてくれ」となことを言った、らしい。

そこでテオドールが私を呪つた、らしい。

なんで全部『らしい』なのかと言つたら、王族の力なんぞ話半分も信じちゃいないからだ。

呪われてから1年近く……いや、まだか?

ザムエル射殺したのが夏で、今がぐるっと季節が巡つて暑くなりかけてる時期だから。

まあでも、そんだけ呪われてからたつてるけどピンピンしてるからな!

健康体そのものだからな!

……話が逸れた。

念話。念話について考えてたんだ。

信じちゃいないが、念話つて使えたならすごく便利だと思つ。

もしもし、レグルス。

突然ですが今なにをしていますか?

私は君のお兄さんに両手両足縛られた上に金属製の首輪はめられて鎖でつながれています。

見事に拉致監禁されます。

あんな迷惑な兄がこの国にいるのなら、教えておいてください。

……教えられても回避しようがなかつた氣がするけれども。

レグルス。私の予想では今、夜の街ナンバーワンの肉感系美女に言い寄られているところに宿屋の自称看板娘が出張つて来た修羅場にいるんじゃないかな？

修羅場が終わつたらでいいので探しに来てください。

……嘘です、できるだけ早急に助けにきて欲しいです』めんない。

だつて君の兄、話が通じなさすぎるー、なにあのフリーダムな人ー！

自称犬系シリウスに関する苦情をレグルスに思念で飛ばそうとして唸つていると、『トトンッ』という音が背後で上がつた。

うわ？ なに？

ドアに向いて横になつていた体勢をぐるりと変えて、音の出所を探る。

ベッド上の芋虫動きだがな！ 『使いの背筋で無駄に素早いよー。

音の出所は……あれだ、『ザ・宝箱』。

シリウスが奪還したという王様のお宝が入つてゐるといつ寶石』
てごてデコレーションな箱だ。

それがコトツコトコトコトツと動いている。

……小動物でも入つてんのかな？

とか思つたら、か細い声が聞こえてきた。

「…………ふふ…………まつべりだよひ…………怖こみひ…………！」
「…………助けてよ！…………」

しゃつくりあげながらの、女の子の声。

あの箱に入れる大きさとこいつことは……幼女か！
王様のお宝は幼女だったのか！

サジタリアス国王がロリコンだったとは知らなかつた…………といつ
かそんな噂が出た時点で国として終わつてゐるが。

そしてシリウスの鬼畜疑惑が濃くなつた。

女の子を箱に詰めるなど言語道断！

「大丈夫。落ちついて聞いて、君が今いるのは箱の中なんだよ」

怒りはとりあえず脇に置いといて、怯えさせないようできるだけ
優しい声を出す。

そうすると箱の動きはピタッと止まつた。

代わりに、すがる様な可愛らしい声が返つてくる。

「そこには誰かいらっしゃるんですか！？ お願ひします！」
「から出
してください！ わたし暗いところダメなんですかうう！」

幼い女の子にしてはずいぶんとしつかりした口調だ。

宝箱の大きさは私が両腕で抱えられる程度で、せいぜい5歳以下の子どもしか入りそうにないのだが……。
まあ今それは重要なことじゃない。

「ええと……やつしたこのは山々なんだけど今の私には不可能で…
…。」「めんー」

後ろ手に縛られてこる」とよつも、鎖の方が致命的だ。
なんせこの無駄に豪華なベッドから降りられないくらいの短さな
のだ。

部屋の隅に置かれたテーブル上にある宝箱には、足が10倍ぐら
いにゅーんと伸びないと頭をもしないだらう。

「ふええ、そんなあー」「

「いやいやいや、まだ希望はある！　たぶん！　とつあえず落ち着
いて、上の蓋が開かないか押し上げてみて」

希望その一、シリウスが鍵をかけ忘れたことを祈る。

オーソドックスな半円型の蓋がかすかに震える。
しかし、それだけだった。

「開きません！」

ちいっ！　やつぱきちゃんと鍵かけてやがったか……。
わざかに蓋が作る隙間があるとはいいえ、密閉気味の容器に女の子
いれて鍵かけるなよ！
窒息したらどうするー！

シリウスを今度から鬼畜と呼ぼうと胸に刻みつつ、声を張り上げ
る。

「やつじう見た田重視の宝箱つて蝶つがいの作りとかちやつちこ
とが多いから、蓋押し上げて踏ん張つてみてー！」

希望その2、宝箱が壊れることを期待する。

ああいつ宝石のついた、それ自体が美術品みたいな宝箱が頑丈だとは思えない。

「ふえ……無理です……開きそつにないです……」「むしろ呑み壊すくらいの勢いで力いれて！……いや、蹴り壊す方がいいか」

腕の力よりも、足の力の方が何倍も強いものだ。

「箱の中で見動き取れるなら、背中を下にして足で蓋蹴り上げて！思いつきり！ イメージとしては……」

なんだ？
なんか足の強い動物つていたつけ？
小さい女の子でも分かりやすいような。

その時、唐突に頭に浮かんだのは『』を持ち始めた頃のこと。
獵師の父さんにについて山に分け入り、急斜面を駆けのぼるウサギ
にまんまと逃げられた幼き日のし�ょっぱい思い出。

「イメージとしてはウサギキックで！」

愛くるしい外見に反して、奴らの脚力は強い。

「……う、ウサギ……ですか？」

「大丈夫！ ウサギなら開けられる！ なぜなら逃げ足だけで生存競争に生き残つてゐる種族だから！」

「そ、そなんですか……ウサギなら開けられるんですね！　ウサギなら！」

良かつた。なんだか思い込みが強そうな子だ。

こういうイメージは100パーセント以上の力を出すために必要なのだ。

国にいた頃、隊長がよく言っていたが「人間、火事場になれば馬鹿力が出るものなんだよ」である。つまり自分はこういう者だという意識がなくなれば、怪力が発揮できたりするかもしれないということ。

それを引き合いに出しての隊長の訓練は……手足に震えがきたので割愛。

隊長は、大好きでしたが、鬼でした。

昔を思い出してもうと遠い日になると、宝箱からぶつぶつと声がもれてくる。

「だいじょぶだいじょぶ……ウサギなら開けられるウサギなら開けられる、わたしなら開けられる……！」

ダムツと蓋を蹴りつける音がした。

その次の瞬間、宝箱がいきなり光り出したのだ。

青白い輝きが宝箱からあふれ出たかと思つと、宝石がぱらぱらと明滅し、やがて光は消えた。

ランプの光とは質が違う、星の光に似た鋭さのある輝きだった。

「な、なに今の……？」

光は、とこいつ言葉を呑みこむ。

あんまりにも呆氣なく、パカッと蓋が開いたからだ。

そうして宝箱から文字通り飛び出してきたのは…………ウサギでした。

「ありがとうござりますう！ おかげで出られましたっ！」

ぴょこんぴょこん、と飛び跳ねてベッドの上にやってきた生物をまじまじと見つめてしまつ。

…………やつぱつウサギにしか見えなかつた。

*

*

*

ふわふわの毛並みは淡い茶色。

ミルクティー色のあまやかな色合いだ。

お腹は白いもふもふした毛に被われていて、実に柔らかそつ。真つ黒なお皿は黒曜石の『』とへきらめく輝いていて燐ぐるしへ私を見つめていますよ。

王様のお皿は、ウサギでした。

とこいつがウサギってしゃべれたのか。

なんてこつた！

「ごめんなさい、今まで普通に食べていました。
むしろ鳥肉の次にウサギ肉食べます。獲りやすいから！」

「……ええっと……えーと、はじめまして？」

「はじめまして…」

混乱しつつ、とうあえず挨拶から始めてみた。
元気なお返事と共に田の前のウサギの口が動く。

お父さん、お母さん、そして隊長。

びっくりです。ウサギさんと会話が成立しております。

「わたしはミーファと申します！ よりしくお願ひします！」

「えー、あー……」うわうわよろしくお願いします？ 私の名前は
エセルです」

「エセルさんですか！ 韶きが綺麗なお名前ですね！ わたしの名
前は祖母が思いつきでつけたものらしいのですが……」

「えつと、『めん』ミーファ。君のおばあさんもウサギなのかな？」

なんで君ウサギなのにしゃべるの？ とは聞けなかつたよ。
いや、これも直球な気はあるけどねー

「めん混乱してるー！」

私の言葉にうす茶色のウサギ……もとミーファはハツとした顔
をした。

……ウサギのハツとした顔つて、狩人の匂いを感じ取った時の顔
だよなー。

野山を駆け回っているウサギと見れば見るほど同じである。
しゃべることを除けば！

「これはすみません！ よく考えてみればエセルさんが驚きになるのも」無理はなく……なにとぞ」容赦を…」「え……いや別に私も悪かつたし……」

なにが悪かつたのか自分でも良く分からぬが、ペコペコ頭を下げてくるミーファにこちらも頭を下げる。縛られてるから、首動かすだけですが。

その様子にミーファが大きなお皿をさらに見開いた。長いお耳をひるひるさせて、綿菓子みたいな身体を私にぶつけてくる。

「ああああ！ 「ごめんなさい！ まずは縄を！ 縄をお取りするべきでしたね！ 少々お待ちを！ ただちに齧り切りますので！」

まずは背中にまわって手の戒めを取り（カリカリ齧つて）、次に足も解放してくれた（カリカリ齧つて）。

すごいね！ ウサギの前歯！
丈夫な縄もすぐさま齧り切れたよ。

「ふうう！ 終わりました！」

「真面目にありがとう。いやー、シリウスっていう鬼畜な軍人に縛られて……あ、やべ腕しづいでら」

首輪はまだついているものの、手足が自由になつた解放感は計り知れない。

しづれた腕をまわしていると、ウサギ……いやミーファがふるふる震えだした。

「…………シリウス様がお縛りになられたのですか…………？」

狩られる寸前のウサギと同じ顔、つまりは恐怖にかられたニーフアの様子に尋常ではないものを感じ取る。

「……君もシリウスにはひどい目にあつたつぽいね。箱詰めなんて全く鬼畜な……」

「ああああああああああああああ！ どうしましょつ！ もしゃ、縄は……あの、その……そそそ、『そういう』恋人同士のお戯れだったのでは……！ わたしつたら、また早とちりで余計なことをしてしまつたのではああああ！」

なにこの思い込みの激しい小動物。
激しく誤解なんですが。

ベッドの上で震えながらぴょんぴょん跳ねるニーフアを、私は死んだ魚の目で見つめてしまった。

ウサギの身の上話&血まみれダガー

「ではエセルさんはシリウス様にいきなり拉致されたとおっしゃるのですね！」

「あれを拉致と言わないなら、何を拉致といつのか分からぬよ」

ミーファの恐ろしそぎる誤解を解消するために、なんかもう疲れた私はひどく投げやりな調子で言葉を放つた。なんで縄で縛られたと言つたら、特殊なプレイをする恋人関係にあると思われるのかが分からぬ。

あれか、ミーファの中ではシリウスは恋人をまず縛る男として記憶されているのか。

ミーファはなぜだかひどく考え込んでいたが、突然ポンと手を打つた。

……ウサギの身で手を打てるってすげい器用なんじゃなかろうか。

「それは俗に言つて目惚れといつやつではありませんか！」

「ごめん。なんでそうなる」

「シリウス様が鎖をつけるほど執着されてるのならば、エセルさんに対して本気だと考えるべきだと思いますよ。だって富廷の女性陣からものす」ニアプローチを受けているのにことごとく冷たい視線ではね返し、今のところ特定の恋人はいらっしゃらないようです。なによりも、陛下のご命令以外には何に対しても興味を持たれないようなシリウス様が捕まえてくるなんて、これはもう恋という他ありません！」

興奮しているらしくミーファが膝の上に乗つて来た。

もふもふした丸い生き物の重みは正直言つて心地いいが、キラキ

「お田田にはげんなりする。

なんだろう、この魂を吸い取られていくような疲労感は。訂正しようと思つたら、ひどく力のない声が出てしまった。

「捕まえたんじゃなく、拉致ね。拉致」

「それでもすごいですよー。だつての方は興味がないものは無視するか斬り捨てて終わり、といつ御仁ですかー!」

「……それ人として問題あるんじゃ……」

「ですがそれを補つて余りあるほど有能で、剣の腕は国一一番。陛下もそれはそれは信頼していらっしゃるんですよー。」

国王陛下のことによく知つてゐるといつ口ぶりに、信じがたい事態の連續で麻痺していた思考回路が動き始めた。

「ところで……ミーファはいつたい何者なのかな……?」

ウサギでしゃべつて、王様の宝。

……知らない方が良いような気もしてきた。

「わたしですか! わたしは陛下の側室です」

可愛らしい声が告げた衝撃の事実に、私はベッドに突つ伏したくなつた。

国王陛下の側室。

この膝の上に乗つている、ふわふわのウサギが。いったい何がどうなつているんだ、サジタリアスといつ國は。

「…………国王陛下ってウサギ好きなの?」

ようやく出た質問がこれだよ。

さつきからサジタリアス国王のイメージが二転三転してきてるんだが、そのどれもがまともな人物像を結ばない。

「いえ、ウサギはお嫌いだそうです。お小さい頃、膝の上に抱っこしたら粗相をされてしまつたことがあるらしく……私もこの姿にはあまりなるなと言われてあります！」

「……この姿？」

「はい、わたし普段はちゃんと人間をしておりますから！　ただ大量の血を見たり、びっくりするとウサギになつてしまふ体質でして……。殿方にキスをしていただくと元に戻るのです。なにやら滅びた国の王族の血が混じつているらしいのですが、よく分かりません！」

王族の血、か。

それは現実に力を持つものなのか。

私としては王族の不可思議な力が本当だとは信じたくないのだけれども。

だつてジェミニーの王族に呪われてるから。

しかし、しゃべるウサギが膝の上にいるといつのは事実だ。

ウサギに変化できる王族の国があつたなんて知りもしなかつたけど、レグルスはなにか知つていてるかもしれない。

ミーファの愛らしい兔唇みづくちがむぐむぐと身の上話を語り始める。

「わたしは祖母と一人で暮らしていたのですが、祖母が亡くなつた後、村にやつてきた奴隸商人さんに売られてしまいまして……。村の皆さんはわたしがウサギになることもほのぼのと見守つてくださる良い方ばかりだったのですが、借金に困つて出戻つてきた村長さんの息子さんが……その、わたしを売り飛ばしたそうです。

そして奴隸市場を一網打尽にしたシリウス様に助けていただいて、

失われた王族の血がビリのじつのところに、陛下と出会ったわけです。

最初はウサギといふことで嫌われておりましたが、色々ありますて今では『お前だつたら例えウサギ姿でも一瞬キスするぐらいはしてやる』とおっしゃつてくださいました！』

「その色々あつての内訳が激しく気になるんだけども……」

なにせウサギ嫌いを克服してまで愛が芽生えたのだ。
いつたい何があつた。

「王様の側室がなんでこんな所にいるの？ 王宮にいよいよ
「もつともです……陛下のお傍を離れてしましました。陛下、不眠
症気味でいらっしゃるのに……ああ、大丈夫でしょうか」

心配そつに溜息をつくミーフア。

ウサギから人間に戻つたら、なかなかの美少女なのだろう。ウサ
ギ姿でも可愛いが。

「側室になつてからお作法にダンスと忙しい日々だったのですが、
アンに眠り薬を嗅がされてさらわれてしまいまして……。あ、アン
というのはスコルピオンの暗殺者さんです。とても気さくなのです
が、とてもとてもとても怖い方です。笑顔で血の海を作るのが趣味
だそうで……わたしはウサギになつてしまひました」

そういうえばシリウスもスコルピオンやら毒サソリがビリのじつの
と言つていた。

スコルピオンもリー・オーと同じく南大陸の大國。

中央海に散らばる島々との貿易権をめぐり、海をはさんでにらみ

合つサジタリアスとは険悪で有名だ。

射手の弓サジタリアスは常に大サソリに向かつて構えられていると言わされてい

射手の弓スコルピオンは常に大サソリに向かつて構えられていると言わされてい

双魚と双子の関係と似たようなものなのだろう。

ついでに考へてみると、勢いよくドアが開いた。駆け込んで来たのは銀色の長い尻尾……じゃない一つに結んだ長い髪をなびかせたシリウスだ。

……どこまで間抜けなんだろう、私。ミーファの身の上話を聞き入つて、逃走についての思考を放棄してたよ。

「無事か」

私の顔を見た瞬間、ビビとなくほつとしたような顔をしたシリウスが意外だ。

崩れることなどないような怜俐な美貌に、ほつれた髪が少しかかっている。

急いで戻つて来たのだろうか。

ベッドの傍まで来ると、シリウスは私の膝上のミーファに恭しく礼を取つた。

「『』無礼をお許し下さい、ミーファ様。氣絶していた貴女を神器に閉じ込めましたのは、ゆえあってのことでした」

「謝らないで下さいシリウス様。なんとなく理由があるんだろうなあ……と思つていきましたから…」

「ありがとうございます。ところで、『』自分で神器を開けられたのですか？」

「はい！　Hセルさんの励ましでなんだか力が湧いてきて、ドカンと…」

「そうですか……では私よりもミーファ様の力の方が上といつゝこと

ですね。陛下のためにも非常に喜ばしい」とではありますか、……今は少々まずい事態が発生しました」

そう言いながら、手際良く私にはめた首環を外す。
シリウスが襟元から鍵を取り出した時は、後生大事に首から下げたのかとツツコミを入れくなつたが我慢した。空気を読んで我慢した。

「端的に言いますと、神器で封じていたミーファ様の気配がもれ、この場所を暗殺者に嗅ぎつけられた可能性が高いのです。毒サソリどもは皆、罠にかかりたと判断していたのですが……嫌な予感もしましたので。この場は放棄し、安全な場所に移ります」

だから私を解放したのか。

これはドサクサに紛れて逃げるチャンス。

……そう思えたのは本当に一瞬だった。

「いやだなあ、ヒトを犬みみたいに。犬なのはアンタだけだろー」

場違いを突き抜けるほど明るい声が響いたのだ。

目を向ければ、誰もいなかつたはずの壁際に一人の少年の姿。赤褐色の髪を一本の太い三つ編みにして、だぼついた黒の衣をまとった不思議な風体をしている。

彼を見てミーファが声をあげた。

「アン！？」

「おこんばんはー。気がつけば、アナタの背後に、そつといる。お茶目な暗殺者アンタレスでっす」

ワインクをした少年は道化じみた口調に似合わないことに……鮮

血が滴り落ちるダガーを手にしていた。

毒サソリの少年

アンタレスと名乗った少年を田にした瞬間、ぞわりと全身が総毛立つた。

弓以外はてんでダメでも私も元軍人だ。

ヤバい状況……命の危機といつもの空氣ぐらう瞬時に感じ取れる。

この少年はヤバい。

琥珀色の田は楽しげに細められ、だるだるした体勢のままなのにまとう雰囲気がヤバい。

血にまみれたダガーを見るまでもなく、毒のある生き物特有のオーラに気圧されそうだ。

本能が私に告げる。

不用意に動くなと。

動いたが最後、致命的な何かが即座に飛んで来るだひつ。

愛用の弓が手元にないことが心もとなさに拍車をかける。

たとえ室内で役に立たないと分かつてはいても、戦場に出る時はいつも共にあつた弓だ。

こんなきつつい殺氣が飛び交う場面にないと裸で猛獸の前にいるような気分になる。

くそう、シリウスめ。私の弓を肆うやつた！

緊迫した空氣を裂いたのは、どんな場面でも涼やかなシリウスの声。

「相変わらず匂いを隠すことだけは上手いな、赤毛」

「どーもー。犬さんに気付かれなって、オレってば優秀つしょー

? まーでも、探知能力じゃアンタの勝ちかな。オレ、アンタの気配たどりなかつたし。いや男の気配なんてたどりたくもねーけどー。

ミーファちゃんみーつけ、つて来たらアンタもう戻つてるし」

「どうか、なら諦める。陛下の宝であるミーファ様を連れ去らうなどという、愚かなことを考えるな」

その言葉を聞いてアンタレスは決まり悪そうに頭をかいた。

背に垂らした一本三つ編みが左右に揺れる。

……そういう貴族でもないのに髪を伸ばしてるのは何故だ。

「あーごめん。ミーファちゃん。それについて一個残念なお知らせがあるんだわ」

「ふえっ！ な、なんですか？」

「俺の親分……スコルピオンの王様からの命令でさー。さうしてくるの無理っぽいなら、殺してこいつてお達しなんだよねー。ほら、うちの大親分、サジタリアスの王様に嫌がらせすんのが趣味な人だし?『奴に初めてできた愛する女を奪つてやるのも面白いが、殺すのもまた一興』って言つててねー」

そんなハタ迷惑な話をにこにこ笑いながらするな。頼むから。

というか一国の国王が嫌がらせで暗殺者派遣すんな。

「つーわけでー、オレとしては残念なんだけどミーファちゃん殺すことになったから

「させらわけがなかりつ」

確固たる宣言と共に、シリウスが疾風のごとく走る。

流れるよつた動きで剣を抜き放ち、アンタレスの喉首に白刃を閃

かせた。

速いつ！

太刀筋が銀色の残像としてしか捉えられない。

けれどその神がかつた斬撃を赤毛の少年はダガーで受け止めた。

いや、違う。 しなした。

シリウスの神速にして重さのある剣とともに打ち合つことはせず、上段から斬り結んで、身体を跳ねさせたのだ。

アンタレスの動きはまるで曲芸師のようだった。

触れ合つた剣の威力を利用して「コマのよつてくのくわると回り、ダン、と天井を蹴りつける。

全身のバネを利用し、田にも止まらぬ速さでシリウスの背後にまわり、投げナイフを繰り出す。

そのトリックキーな動きに隊長の言葉を思い出した。

『暗殺者っていうのは室内戦闘の熟練者だよ。 レグルス、もし君が暗殺者と対峙することになつたら、室内でやり合つことは避けるべきだね』

あれはいつだつただろうか。

なぜだかレグルスに向かつて「んこん」と諭していた隊長を偶然見かけたのだ。

レグルスはいつも通り、ふてくされたような顔で「うるせえ」などと言つていたと記憶している。

広めの寝室はいえ、この場も立派に室内だ。

シリウスの強さは今まで私が見た剣士の中でも飛び抜けているけども、アンタレスの体さばきとスピードは尋常じやない。

どちらが優勢とも言えない苛烈な応酬から、目が離せなかつた。

しかし『使い』として鍛えた視力のおかげだらう。

視界の端で『い』めいた『何か』に私の身体が反応した。

うわ、なんだろう。ものすごく嫌なものを見た気がする。

頭で考える暇などない。

反射的につかんだ枕で、ベッドにはい上がってきていた『それ』を振り払う。

絨毯にぼとりと落下した『それ』に、全身の毛穴から汗が噴き出した。

……つい、実物は初めてみるけど想像以上にグロテスクだ。

太い尾を持つ、禍々しく黒いサソリだった。
仰向けに落下したサソリの、つそつぞといづくめく脚に吐き気がこみ上げる。

「おねーさん、良い勘してるねー」

ひゅうっ、と口笛を吹き、楽しげにアンタレスが叫ぶ。

軽口を叩きながらもダガーと投げナイフの連続攻撃は途切れることはなく、金属同士がぶつかり合う高い音を響かせている。
そのため、こちらに一瞬気を取られたシリウスはわずかに体勢を崩した。

アンタレスは無邪氣とも言えるほどあつけらかんと笑っている。

「気づかない内に殺してあげようって思つてたんだぜー？ そいつ一番毒強いクロちゃんって種類だから、刺されたら一瞬での世だつたのに」

純粹に好意でそう思つていたという口調。

あーあ、と嘆く声を心底恐ろしいと思つた。

「これでちょっと怖がらせて殺すことになつちつた。ごめんなー、ミーフアちゃんと見知らぬおねーさん」

その後にアンタレスが口にした言葉は私には理解不能な言葉だつた。

……古代語だらうか？

北大陸も南大陸も、主要な国々はみな統一言語を使っていて、国によつて訛りはあるものの意味が分からぬといつことはないのに。

『我が血において命ず。現出せよ、千の黒蠍』

その声に呼応するよつこ、グジャリグジャリと、なんとも不気味な音が響く。

皿をやれば、壁にいつのまにかあつた赤黒い染みからサソリが大量にはい出でくる音だといつ信じたくない事実を、理解せざるを得なかつた。

ちよつ！ なんだその反則技は！

暗殺者にそんな不可思議な技が使えるだなんて聞いてないよ！

「はい。これがオレのしょぼーい能力。ホントは親分みたいにかけ一大サソリになりたいんだけどね。できなくつてさー。そん代わりに自分のそばにサソリちゃん召喚できんの」

おしゃべりの間にも攻防は止まつてはいない。

何度目か分からぬ斬撃をシリウスが繰り出し、長剣とダガが火花を散らす。

「随分と余裕だな。説明などするとは」

「えーだつてオレ、ミーファちゃん好きだし。会つたばっかだけどそこのおねーさんともお知り合いになりたかったし? もう残念で残念で……」

ダガーがものすごい音を立てて、シリウスの剣をはじいた。腕力の差を考えてだらう、始めはまともに斬り結ぶことさえ避けていたというのに。「まさか……腕力が上がっている?

「あと、ちょっとラリつてるからやー。ドーピングしてんの。アンタと互角にやるためにねッ!」

速さも力も増してきているアンタレスの相手で、シリウスはこちらを助ける余裕などない。

いやそれどころか、黒光りするサソリの群れにも対処しなくてはならず一気に劣勢に立たされたと言えるだらう。

じょじょに床は黒サソリに埋め尽くされ、その大部分は意志を持つてミーファに向かつて来ていた。

たかが毒虫と侮ることなどできない。

動きは素早く、時には跳ねてベッドに飛びついて来るのだ。

毒針尻尾をくねらせつつのジャンプをかましてくるサソリが、無数にうじやうじや。

ううう、気持ち悪い。サソリに刺されて死ぬなんて真つ平ごめん

だ！

腕の中で震えていたミーファをしっかりと抱え直す。

声をかけてあげたいけどもアンタレスの注意を引くのはまずいため、やめておいた方が賢明だらう。

アンタレスがこちらに背を向けた瞬間を見計らい、ミーファを抱き抱えたまま窓際まで走った。

とにかく逃げなくてはならない。

確実に迫つてくる毒サソリの群れから。

バルニーへ続く大型窓を開け放つた瞬間、心臓がドクリと悲鳴をあげた。

ひたすらに軽い口調の死刑宣告が背後から投げつけられたからだ。

「はい、逃げちゃダメー」

殺氣の塊と共に、投げナイフが空を切る音がした。

暗殺者のナイフだ。おそらくは猛毒が塗つてある。

アンタレスの攻撃を回避するシリウスが慎重だったのも、おそらくはそのせい。

背に向かつて飛んでくるナイフがどこかに刺されば、一巻の終わり。

避けないと。なんとかして避けなければ。

でも、もう遅いと心臓が跳ねた瞬間にどこかで諦めていた。

戦争中についつも思つていたことだ。

命の幕切れは蠟燭の炎を吹き消すように、あっさりと訪れる。
大仰な前振りなんて存在しない。死は当たり前のような顔をして
突然やつてくるのだ。

隊長と両親と、そしてレグルスの顔が頭をよぎる。

ごめんなさい。

どうやら私はここまでのようにです。

レグルスには、随分前から伝えたかったことがあつたけれど。

ズブリ、と。
投げナイフが肉に突き刺さる、にぶい音が耳朵を打つ。

覚悟していた痛みは
ない。

なんでだろう。

思わずつぶつっていた目を開くと、私をかばうように腕に抱いてい
る誰かと視線が合った。

「くそ、やつと見つけたと思つたら……。なにやつてんだ、馬鹿工
セル」

鮮やかな緑の瞳が、忌々しげに私をにらんでいる。
見慣れた不機嫌顔なのに、眉のしかめ方がいつもとは違つた。

まるで、痛みをじりあらぬかのよつた。

「

レグルス」

名を呼んだ声は私のものではなことつて、ひびく震えていた。

君の手が頬に触れて

ドクドクと、鼓膜を突き破るように心臓の音がした。

なんで、レグルスがここにいるのか分からぬ。
頭はレグルスの背に何が刺さつてゐるのか考へるのを拒んで、熱

をはらんで沸騰するかのように痛んだ。

そうして煮えたぎつた思考から吹きこぼれた記憶が、ひとつ私に押し寄せてくる。

戦場ではすぐ隣にいた仲間が倒れる瞬間を幾度も見てきた。

深手を負い、命が消えていく仲間の手を握つていていたこともある。
血と土煙に沈んだ世界で生き延びるには、私たちの命はもうすぎ
て手のひらから砂のようこぼれていってしまう。
そしてこぼれ落ちた砂を取り戻す術はないのだ。

私はいつだつて、自分はいつ死んでもおかしくはないと分かつて
いた。

弓の腕前以外に取り柄のない、非力な兵士。

しかも女の身。

いつ終わるともしれない戦争の中で、私もいつかこぼれた砂の一
粒となるのだろうと、漠然と思つていた。

けれどどんな激戦が続く日々の中でも、レグルスが死ぬなんてこ
とは不思議なくらいに頭に浮かばなかつたのだ。

自分が死ぬところは想像がついてもレグルスが倒れるなんて夢にも思わず、戦場を駆け抜け血まみれになつても光を失わない彼がただただ眩しかつた。

国を追放されてから、レグルスと一人、旅をした。
穏やかとは言えないけれど、戦とは無縁の日々では忘れてしまっていたのだ。

私

命の終焉はあつさりと、唐突にやつてくることは覚えていた。
しかし『どんなに強い人間にも例外なく』死は訪れるという事実
は 意図的に忘却の彼方へ押しやつていたことに気づく。

西日の中を黒い土煙がもうもつと舞つていて、あの戦場。
隊長が斬り捨てられ、地に倒れ伏した光景がまざまざと蘇つた。

私はまた、失うのだろうか。

嫌だ！

あの戦場からずつと麻痺していた魂が血を噴き出すよつに全ての
感覚を取り戻し、叫ぶ。

嫌だ嫌だ嫌だっ！　怖い、怖いよ……。

レグルスを失うかもしれないと考えただけで、心臓を切り刻まれ
るような痛みが走る。

息をすることさえ辛い。

耐えられない痛みの中に一人取り残されるくらいならば、本当に
心臓が止まつたらどんなにかいいだろう。

ふいに熱い手のひらが私の小刻みに震える頬に触れた。
輪郭を確かめるようになぞる指先に悪夢を拭つてもらつたように

急に息をするのが楽になり、今まで微動だにできなかつたことを自覚する。

「怪我はねえな。……下がつてろ」

痛みを耐えるように眉をしかめていても、生命力に溢れた瞳は少しも損なわれていなかつた。

形の良い口元には、不敵な笑み。
狩りに出る前の猛獸の笑みだ。

レグルスは言つやいなや、俊敏に身をひるがえし銀色の何かを投げ放つた。

視界によぎつた血の滴に、それが彼の背に刺さつていたナイフだと知る。

鋭い音を立てて飛んだナイフは、こちらに迫つていたアンタレスへの牽制だつた。

ダガーを振りかぶり跳躍してきたアンタレスが空中で身をひねる。ナイフを紙一重で避けた暗殺者の少年は琥珀色の目を嫌そうに眇めた。

「あつぶねー。つーか、見知らぬおにーさん、アンタ何で死なねーわけ？ ナイフに仕込んであんのは象でも一瞬で殺せるってえ貴重な毒なんだけど？」

「は、毒なんざ俺にや利かねえよ」

「マジでか。……オイオイ勘弁してくれよ。チートなのはそこの大銀髪犬だけで十分だつつーの」

部屋の奥に目をやれば、群がる黒サソリに舞つよつた剣技で対処しているシリウスの姿。もはや押し寄せる雲霞の「」ときサソリの大

群を剣さばきだけで駆逐していくのは、ある意味恐ろしい芸当だ。シリウスの相手を、十分な数出現したサソリにまかせ、アンタレスは目的を達成すべくこちらに来たのだう。

そもそもの目的。

即ち私に抱っこされているニアーフアを殺すために。腕の中にいるふわふわした生き物の温もりを守らなければと思うのに、竦んでしまった足は思うようには動かず、私はただ戦いを見つめていた。

ランプの明かりにも煌めく金色の髪をなびかせ、レグルスが駆ける。

獲物に食らいつく獅子の」とく、猛然とアンタレスめがけて剣を振るう。

剣線は技巧を尽くしたものではなく、ただひたすらに真っ直ぐだつた。

その分、ひどくシンプルで速さと力強さを秘めた一撃。

足元にひじめく毒サソリを蹴散らし、危険なはずの毒虫にも頓着しない。

一切の迷いのない、決然とした剣が一閃する。

ギィイインッ！

激烈な音が響く。

レグルスの剣は禍々しいダガーと斬り結び火花を散らしてそのままダガーごとアンタレスの体を吹っ飛ばしていた。少年の体が壁に叩きつけられ、ずるりと床に落ちる。

すぐに立ちあがつたもののアンタレスの手にダガーはなく、部屋

の中央に転がっていたそれをレグルスは数匹の黒サソリごと隅へ蹴り飛ばした。それから長い足に這い上つてきていたサソリを面倒くさそうに振り払い、アンタレスに向かつて剣を構える。

「一つ聞く。てめえの親父はやたら色が白くて目が紅くて、蛇を首に巻いてる男か？」

「……つく……ははっ、いきなり何？ オレ親の顔なんて知らないけど？」

「自分がなんで王族の力を使えんのか、疑問に思つたことはねえのか？」

「スコルピオンの後宮はすげー規模だかんね。王族の血を引いた人間がわらわらいても不思議じやないっしょ。たまたま血を受け継いでいて、力を持つてるのが暗殺者のオレだつたつてだけだろ？」

「条件が重ならねえ限り、いくら血を受け継いでても力は使えねえよ。血を継いでるだけでいいなら力使える奴がもつと大勢いるはずだ」

「……悠長だねー、見知らぬおにーさん。言つとくけど、アンタがオレに勝てたのは運だよ。単にクスリの効果が切れる時間がちょ一どさつきだつたってだけ。……今オレを殺さなかつたこと、アンタきっと後悔するよ」

呪いのような言葉とは裏腹にあつけらかんとした笑みを浮かべて、アンタレスは何事かを呟いた。

その小声は聞き慣れない響きで……黒サソリを召喚する時の韻律に似ている。

刹那、床にできていた血の染みにぐぶりとアンタレスの体が沈みこむ。

そう思つた次の瞬間には、少年の体は部屋から消えていた。

もはや妙なことが起こりすぎでいて驚けないが、不可思議なことは連續して起こった。

乾いた音を立てて、あれほどいた黒サソリが全て砕け散つたのだ。あとにはただ、赤黒い砂のようなものが残っているだけ。

「レグルス！」

こんなに必死に叫んだのはいつ振りだつただろう。めつたに出さない大声に喉の奥がひりついて、急いで駆け寄つたことで痛みは更にひどくなつた。

「傷を、手当しないと……」

上着にまで血が滲んでいる背から視線がそらせない。手を伸ばそうとした瞬間に、気を利かせてくれたミーファがぴょんと跳ねて腕からすり抜けていつた。

「そんな今にも死にそうな顔すんな。これぐらいの傷なんともねえよ

「でも毒は？ 毒が塗つてあつたつてアンタレスが言つたはず……」

その言葉になぜかレグルスの眉間の皺が深くなつた。

「アンタレス？」

「さつきの暗殺者の名前。軽い調子で自己紹介してた

「…………つち、予想通りかよ。あんのクソ親父ほんつとうに迷惑だな」

忌々しく吐き捨てた言葉の意味がよく分からぬ。

けどそんなことよりも私はこれ以上レグルスの体から血がこぼれ落ちるのを止めたくて、強引に背中にまわった。

「とにかく止血しないと。毒の心配がないなら尚更すぐにでも
「あ、ちょ。おい、服を剥^はいりうとするなー。」
「上着脱いで。手当ができない」

もどかしくてシャツの襟元に手をかけると、なぜか顔を赤らめたレグルスがそれを止めようとする。

あせつた調子で私の手首をつかみ、そこに視線を這わせた瞬間、彼の柳眉が跳ねた。

「…………」
「……」

私の手首は縛られていた名残か、くつきりと紅くなっていた。

「いや今はどうでもいいし。それよりも止血
「…………どうでも良くねえよ」

恐ろしく不機嫌な声が降つて来たかと思つて、その声を紡いだ唇^{くちびる}が私の手首に近付いてきて……

「離れろ、愚弟」

凍ついた夜よりもなお冷然としたシリウスの言葉と共に、殺氣がぶつかって来る。

強烈な殺氣から隠すように背に庇われてレグルスの血の匂いを間近に嗅ぎながら、早く止血しないと、とそればかりが私の頭をよぎ

つ
て
い
た。

【その炎の姫】

身の内を焼き焦がすこの感情を何と呼ぶのか、シリウスは知らなかつた。

彼は生来、人に執着する方ではないのだ。

宮廷で恋愛遊戯を仕掛けられても煩わしいとしか感じず、男としての欲を処理するには後腐れのない女を選んできた。

シリウスにとって至上の行動原理は主からの命令である。唯一無二の主君、サジタリアス国王の命を確實にかつ迅速に果たす獵犬であることには絶対の誇りを抱いているし、これからもそれは変わることはないだろう。

けれど今回の任務中、予想外の事が彼に起つた。
陛下の寵姫たるミーフアを奪還したのち、サジタリアスに毒針を向け続ける愚かな暗殺者どもを警戒し港町を巡回していた時のこと。ある女を視界に捉えたのが事の発端だった。

初めは、変わった女だ、としか思わなかつた。

脣下がりの的当て場は上品とは言えない男どもの熱氣で混み合つていて、淡々と手を上げた若い女はそれだけで異質だつた。

真っ直ぐな長い髪を一つにくくり、髪と同色の落ちついた色の瞳をした女。

その回りだけ時間が止まつてゐるよつた、凧いだ湖面の如く静かな雰囲気をしていた。

女が挑もうとしていたのはかなりの難度の的だ。

もし射抜けたのならば宮廷に仕える一流の射手と比べても、なんなら遜色ない腕をしてゐることになる。

射抜けるはずはあるまい、と思つていた。

見ていると、弦を張つて立ち上がった女の瞳がふいに翳つた。

酔つ払いの戯言が耳に入ったのだろうとシリウスは推測して、何故かひどく苛立たしく感じた。

これしきの事に傷つくくらいならば、目立つ事などしなければいい。

おそらく彼女が瞳を翳らせたまま矢を放ち、的を外したならばシリウスは彼女のことをするに忘れただろう。

しかし彼は翳つた瞳が一瞬にして光を取り戻す様を見た。自らに言い聞かせるよひつな言葉と共に、その劇的な変化は訪れたのだ。

『それだけで、十分じゃないか』

彼の鋭敏な感覚は小さな女の呟きを捉え、その響きはひどく胸を騒がせた。

（おそらく、あの女は弱い女だ。他愛もない悪意の一一つを刻んでしまうような、^{やわ}柔い心の）

だが弱い心で口を律し、弓を引く姿は肺腑^{はげふ}に震えが来るほど美しく思えた。

事実、女がその細腕に似合わぬ長弓を引き絞る姿は凜々しく、彼女を馬鹿にしていた観客さえも思わず息を呑んだのだ。

欲しい、と彼の本能が叫ぶ。
あの女が欲しい。

焼け付くような渴望が瞬く間に心を占めた。

シリウスは迷わない。

彼の行動原理の第一位は主の命令だが、それ以外のことは全て直感に従つていいからだ。

感覚と同様に、彼の直感は優秀で間違いを選んだことなど一度としてない。

だから女を氣絶させて、国王直属の部下だけが使える隠れ家に運び、とりあえず縄で縛つた。

逃げられると不快だからだ。

彼は気づいてしまつていた。女を氣絶させ、その体を軽々と抱きあげた瞬間、知つている『匂い』が染みついていることに。

レグルスはシリウスが唯一共に育つた兄弟だった。
クソ生意気な十三の時にクソ生意気なことを言つてボレアリス家を飛び出していつた愚弟。

八年たつて団体だけは一人前になつたようだが、人に慣れない野良猫のような捻くれた目つきはそのまで、今も生意気にシリウスを睨みつけている。

毒も呪いも一切効かないという便利な体質を除けば、レグルスはシリウスに何一つ敵わない。そんな出来の悪い弟に睨まれようがいささかの痛痒も感じぬはずだというのに、今回ばかりは事情が違つた。

全ては、レグルスの背に寄り添うように立つ女のせいだ。

彼女の存在が今まで抱いたことのない感情に火をつけ、シリウスの胸を焼き焦がす。

彼は嫉妬という炎を、生まれて初めて感じていた。

「俺は離れると言つたはずだが。聞こえなかつたのか、愚弟」「……何でお前の指図を受けなきやならねえんだよ、シリウス」「俺が不快だからだ」

半眼でレグルスを睨みつけ、シリウスは剣を構えた。

毒サソリをいくら斬り捨てようとも濁ることのない銀色は国王から下賜された名剣たる証だ。澄んだ刃はシリウスの凄烈な気迫を帶びて、更に輝きを増す。

対するレグルスも剣を下段に構え、牙を剥いた獣の如き殺氣を放つ。

まさに一触即発。

触れれば斬れるようなピリピリとした空気が部屋に満ちそれを打ち破ったのは争いの焦点である女だった。

「すいません、兄弟喧嘩なら後ににしてください」

なんだか妙に迫力のある声だった。

レグルスの背からあつさりと姿を現した女 エセルは常であれば無氣力なほど廻いでいるはずの瞳に剣呑な色を宿しており、雰囲気が一変している。

一言で言えば、田が据わっていた。

「何でいきなり殺し合いで始めるみたいな雰囲気になつてゐるのか知りませんが、とりあえずレグルスの手当てが先です。止血しなきや止血」

「お、おい……エセル？」

「黙れレグルス。とりあえず服の上からでも止血する」

言い捨てるヒセルは手巾を傷口に当て、圧迫止血法を試みる。そしてレグルスの背に手を当てながら、じりじりシリウスに視線をやつた。

「シリウス、この状況で真っ先にやらなきゃならぬのはミーファの無事の確認じゃないんですか？」

「……！」

正論だった。

ぐうの音も出ないほど、その通りな意見だ。

（俺としたことが陛下の命ごめいを忘れるとは……）

シリウスに『えられた命令ごめい』を無事に奪還することである。

敬愛する主の宝が心身共に損なわれていいかどうかを確かめ、もし万が一取り返しのつかない傷を負ってしまったのならば死を持つて償う。その覚悟はもちろんあつた。

それなのに、である。

訳も分からぬほどに身の内を焼く感情に振り回されて、ミーファの存在さえ失念していたのだ。

今までにない失態にシリウスはうろたえ
な顔を取り戻すとミーファに頭を垂れた。
だが一瞬で冷静

「……お怪我はしませんか、ミーファ様。そしてこの失態、無事に陛下の元へ貴方様を送り届けたのちに如何様な処分も受けますゆえ、今は御寛恕を願いたく……」

「ふ、ふえつ！ いい、いいんですよシリウス様！ わたしの事はお

氣になさらず、恋の鞄当の続きをビリビリ…」

「そのよつな訳には参りません」

部屋の隅っこでドキドキしながら事の成り行きを見守っていたミーファは、突然こちらを向いた一同の視線に目を白黒させた。ウサギ大慌てである。ぴょんと跳ねる仕草が愛らしい。けれど約一名、そんな感想を持てない人物がいた。いつもと違うエセルにちょっとびくつきながら大人しく止血を受けているレグルスが、呆然と呟く。

「ウサギが喋つてるぞ……」

「ミーファは王族の血を引いてるんだって。……そういうの、分かんじやないの？」

「アンタレスのは嫌な感じがしたからだ。クソ親父と顔も似てたし

な」

「……後で全部説明してもらえる?」

「……分かつたよ」

顔を近づけ合つてこそと話をするエセルとレグルスの姿に、やはり怒りに似た感情が湧いてくるのをシリウスは止められない。長年一緒にいた者同士だけが持つ親密さが、そこにはあった。今すぐ異母弟を斬り捨てたい衝動を抑えつつ、シリウスは口を開く。

「暗殺者をわざと逃がした甘さは腹立たしいが、借りは借りと認めよつ。この場は見逃してやる、レグルス」

「……シリウス、お前あいつがクソ親父の子どもだって気づいてたよな?」

「当然だ。匂いと名ですぐに分かる」

「殺す気だったのか?」

「愚問だな。陛下の敵は殲滅することこそが俺の使命。……俺にはお前の甘さの方が理解できん。半分だけ血が繋がっているとはいえ、共に育つたわけでもない者に兄弟の情を感じるのか？」

「そういうわけじゃねえよ。……殺すのは気分悪いだけだ」

「そこが甘いと言つてはいる」

昔からこの弟は愚かだったと、シリウスは回想する。
人になつかないくせに妙に人を恋しがる猫のような、矛盾した性質を持つのだ。

(そうして余計な事をぐだぐだと考える)

募る苛立ちを押し殺す。

現在の最優先事項はミーファを無事に王宮へ連れ帰ることだ。
女を巡つてこの場を戦いの場とするには、いつ新たな刺客が来るとも分からぬ今の状況は差し迫り過ぎている。

ミーファと神器を抱え、部屋を出てゆこうとしたシリウスは最後に一つ、レグルスに言葉を投げた。

「もうじき太陽が双^{そうじきゅう}児^{めの}宮^{みや}に入る。 その意味を知つてゐるのだろうな、愚弟」

レグルスはぐつと詰まり、緑の双眸の色を濃くした。

「……知つてるに決まつてんだろ。警戒はしてる」

「自分の力を過信するな。お前は出来損ないだと散々言われていた

「どううが」

「何が言いたい」

「今、俺がエセルを連れ去つた方が安全だろうと言いたいだけだ」

「つるせえよ。さつさと失せろ」

「口だけは一人前だな」

まあいい。ヒシリウスは嘆息する。

自分の脚ならばすぐにでも駆け戻つててくることができる。

異変を感じ取つたならば主の許可を仰いで戻ることを心に決めつつ、シリウスはエセルの姿をもつ一度目に納めると、今度こそ部屋を後にした。

どうも命令には忠実っぽいシリウスがミーファを抱っこして出て行つた後、私たちもとつと不穏な空気が漂いまくる屋敷を後にした。

大量の黒サソリだつた砂で空氣悪いし、アンタレスみたいな暗殺者がホイホイ来るかもと思うと震えが来ますよ。

ええ、これ以上、国家規模の危険事態に巻き込まれてなるものか。ちなみに愛用の弓だけは回収した。

寝室の隣の書斎っぽいところのテーブルにあつて、探す手間もからなかつたのが救いだ。新調したばかりの肩掛けベルトを手に取り、弓道具一式を抱きしめたらレグルスに「お前、弓に関するただけはテンション高いよな」とツッコミを入れられた。

……つるさいな！

そんなこんなで無駄に広い貴族の館（だと思つ）から脱出し、夜明けが近い白み始めた空の下を一人で歩いて、無事、宿に帰還したわけである。

目を血走らせた自称宿屋の看板娘が入口で待ちかまえているかも、という心配は杞憂に終わった。下働きの小僧もまだ眠つているのか、ネズミの気配しかしない食堂を通り抜け、誰にも会わずに部屋に戻ることができたのだ。

よし、ついてる。

とてもとてもハードな夜すぎて、勘違いに基づくジヨラシーファイトをかわす余裕すらなかつたので。

ああ……ハードだつたな……。

拉致られて縛られて、衝撃の事実を聞き、ウサギがしゃべり、暗

殺者に大量のサソリをけしかけられたし殺されかけた。

……他人に話したらまず間違いなく頭のおかしい人扱いされそつなレベルに一般的ではない夜だった。

正直な話、体力・気力共に限界が近い。

部屋に入つてベッドを見た瞬間倒れこみたい衝動を抑えるのに苦

労したほどだ。

それなのに、ああそれなのに。

何でだか私たちは不毛な争いをしていた。

* * *

「だから手当てなんて必要ねえ傷だつて言つてるだろうが！」

「そんなわけない。そんなわけはないよ、レグルス。だつて血がだらだら出てたし」

「もう止まつた」

「そりや縛つて止血してあるからね！ 決して治つた的な意味合いではないよね！」

現在、レグルスが駄々をこねております。

傷の手当てをしたくないとか何とか。迷惑極まりない、真面目に。疲れ過ぎて充血しているだろう目でにらみつけてやれば、ぷいつと視線を逸らされた。

……子どもか！

「……こんな浅い傷、ほつときや治る。言つたら、俺に毒は効かねえ」

「毒は効かなくても化膿するかもしれないし。きちんと包帯巻いと

かないと傷口がひきつれてひどい痕が残るよ^{あと}
「別に気にしねえよ」

そう言つて自分のベッドでさつたと休もうとする奴に、ふちんと
きた。

さつきから私、沸点低いなあ。

きつと疲れてるんだ。変な人に出会いすぎて。

レグルスが何故、手当をするのを嫌がるのかに心当たりがないわ
けじゃない。

私は口元に嫌な笑みを浮かべつつ、レグルスにじり寄つた。

「……へえ？ ジャあもつともつと軽い『痕』のことなんか尚更氣
になんないはずだよね？」

「…………何が言いたい」

「別に。キスマークを見られたくないから、上着脱ぐのさつきから
嫌がってる人にどこの乙女だよってツツコミ入れたいだけ

「…………！」

尻尾踏まれた猫みたいに、レグルスの毛髪が逆立つたように見えた。

見開かれた緑色の瞳が綺麗すぎて、そんなに予想外だったのかと
毒づきたくなる。

「宿屋の看板娘、あの赤毛で色っぽい子に迫られたんでしょ。何で
そーゆーことは隠したがるのか知らないけど、気にしないからとにかく傷の手当てさせて」

「…………いつから気づいてた」

「旅のわりと最初の方から。隠してるから知らんふりしてたけど、
意味ないねこれ。つか、レグルスも男だし、禁欲主義でも何でもな

いんだから普通のことじやないの?」

軍隊に長くいたから、男は女が欲しくなる生き物だつて知つている。

むしろ健康な男なら自然の摂理だし、据え膳食わぬは男の恥つて言葉もある。

私が一応女だから遠慮しているのか、来る者拒まずなレグルスは私には知られないようにしていたらしが。今まで随分長い旅だったのに、本当に隠せていると思っていたらしいことに笑いがこみ上げてくる。

「だから別に今さらキスマーク見たぐらいで騒いだりしないし。もう眠いし。……早く傷を見せて。ケンカするのもしんどい」

心の底から面倒くさそうに言ったのが効いたのか、レグルスは苦虫を噛み潰したような顔をしていたけれど大人しく上着を脱いだ。ベッドに腰掛けた奴の隣に座り、私はとつと手当てを始める。なんだか先刻よりも更に疲れていた。

その傷は右の肩甲骨近くにあつた。

レグルスが自分で言つていた通り、傷自体は浅い。止血のためにきつめに紐で結んでいた手巾を外しても、もつほとんど血も滲みだして来なかつた。

ナイフが刺さつたと言つても、投げやすいように加工された殺傷力は毒にまかせた刃は本当に小さなものであつたらしい。

この分なら変な後遺症も出ないだらうことにひどく安堵した。そりやそうだ。私なんぞをかばつたせいで負つた傷なのだから、重傷であつたら夜も眠れないほどの罪悪感に苛まれるだらう。

水差しで傷口を清め、純度の高い酒……アルコールで消毒する。

旅のついでに摘んでいた薬草をもんで清潔な布で包んだものを傷

口に当て、その上から包帯をぐるぐる巻いて、出来上がり。

黙々と作業したおかげで、あつけないほど手当てはすぐ終わった。手当て完了と告げようと顔を上げた瞬間、傷だけ見ていた時には気づかなかつた諸々が田に飛び込んできて息を失う。

それほどに目の前にいる生き物は美しかつたのだ。

宿屋の安っぽいランプの赤い灯のためいつもよりも色が濃く見える金髪は炎を反射してゆらめくよう輝く。

私が適当に切つていいせいで不揃いな毛先が首筋を過ぎ、無造作に肩口に掛つてゐる。

獅子のタテガミみたいだ。豪奢（ごうしや）で、勇壮な。

獅子を連想させたのは髪だけではない。

何もまとつていらない上半身はしなやかな野生の肉食獣そのものの優美さを備えていた。

広い肩幅に、引き締まつた筋肉のついた逞（たくま）しい腕。

無駄なものなど何一つない背中は、包帯が巻かれているにも関わらず、そこにみなぎる爆発的な力強さを感じさせた。

長剣を自在に繰り出すためにある剣士の体だ。

軍にいた頃から、どれほどレグルスが厳しい鍛錬を積んできたかずつと見てきた。

時を重ねることに増す強さも。

けれど力強い剣技を生み出す体が、これほど美しいものだとは。

……いや、想像は何度かしていた。

レグルスが行きずりの女を抱くたびに、振り払つてもつきまとつ曖昧模糊とした想像。

思えば私がレグルスに本格的な手当てをするなんて、初めて出会つた15歳の時以来になるのだ。パイシーズで軍にいた頃、レグルスに手当てを施す役回りは私にまわつてこなかつたから。

六年前は確かに少年だった身体は、しなやかに強い大人の男のものに成長していた。

「おい、Hセル？」

しまった。

うつかり身惚れていて、じつくじしつかり眺めまわしていた。

後ろを振り返ったレグルスの顔が、私を凝視して固まる。

……やばい、変態みたいに觀察していたのがばれたのか！？

慌てて他に傷はないか確認してただけだとか、もつともらしい言い訳を紡ごうとしていたのに、地を這うみたいな低い声に遮断されてしまつ。

「…………おい、耳の後ろにある、その紅い痕あとは何だ」

紅い痕？

反射的に思い出したのはシリウスに首筋をなめられたこと。いやいやいや、あれは首だし。なめられただけだし。

きつと虫にでも刺されたんだよ。

そう、言おうとしたのに。

私の口が何かを言つ前に、私の身体は凶暴な速さで押し倒されてベッドに沈んでいた。

反射的につぶつてしまつた目を開くと、間近にあるのはレグルスの顔。

女なら誰でもうつとりすること請け合いの野性的な美貌は、爛々と光る縁の双眸があまりにも凶悪なせいで獰猛な獸そのものに見えた。

「答える。シリウスに向された」

押さえつけた獲物の喉首に食らいつくのを堪えていゆよつな、獸の低い唸り声。

声が孕む怒氣に竦んで、息がうまくできない。

【抱えた理由、消える理性】

手当てを施されている間ずっと、なぜエセルはこんなにも無防備なのだろうと、苛立たしい思いがレグルスの心を占めていた。

明け方が近いとはいえ、夜。

長い間共に旅をしてきた間柄とはいえ、男と女だ。

そして治療のためとはいえ、ベッドに腰掛けた男の裸の上半身にエセルはこだわりもなく触れてくるのである。

エセルの指が素肌に触れるたびに走る甘い痺れが、レグルスの身の内にある欲に火をつけていくというのに。

（……男がどういうもんなのか、全く知らないわけじゃないとその口で叩いておいて……）

レグルスはエセルが男女の機微に全く関心がなく、とんと理解していないと思っていた。

何しろ金がもつたないからと言つてベッド一つの部屋を取らうつという女なのだ。

野宿での添い寝に關しても、そう。

寝息を立てるエセルの顔を見ながら、自分がどんな思いで堪えていたかということなど考えつきもしない。

夜の西風が運んで来る悪夢からエセルを守りたいと願つた。

己の身に巢食う欲望を押し殺して、エセルに取りついづとする悪夢を威嚇し追い払い続ける夜。

浅い睡眠は、夜が明けた後の深い眠りで補つてきた。

レグルスの寝起きが最凶に悪いのはそのせいである。

エセルに呪いをかけたテオドールはジョニー双王の片割れとして十分な力を有していた。

ジエミーは北大陸の西端に位置する国。

王族は双子の神の血を引き、双児宮の星々から加護を得る。

双児宮は風のエレメントを司り、エセルを狙い澄ましたかのようにジエミーから吹いて来る『風』はひどく彼女を蝕むものだつた。

王族としての顕著な力を持たないレグルスに取れる方法は二つだけ。

一つは、双児宮とは対極をなす人馬宮の加護を受けるこの国サジタリアスへエセルを連れてくること。國士には悠久の時、星の光がしみ込んだ蓄積があり、國独自の力に守られている。サジタリアス国内であれば、ジエミーの呪いは軽減されるのだ。

二つは、悪しき『風』をエセルに寄せ付けないこと。

能動的な力をほとんど持たない代わりに、レグルスの身体は抵抗力が異常に高かつた。毒はもちろん、呪いの類の一切を無効化しあね返す。その血が放つ一種の『結界』を寄り添うことでエセルに被せ、彼女を呪いから守ろうとした。

長い旅の間、レグルスはエセルを守るために全力を注いでいた。だが人間の三大欲求に抗い続けるのは限界がある。

睡眠欲は朝寝で補うこともできるし、軍隊時代で培つた耐性で乗り切つた。

しかし性欲に関しては話が違つた。

野宿の時は寄り添つて眠り、宿を取る時もあまり離れていては呪いに対する結界の外に出てしまつ可能性があるので一つの部屋で寝る。毎日毎日、愛おしいと思う女が近くにいるというのに手を出しちてはならない。

いつたいどんな拷問だ、これは、とレグルスが思ったことは数知れない。

理性が切れかかつたことも一度や二度ではないのだ。
だからエセルを襲わないために、寄つて来た女を適当に抱いて性欲を発散させていた。

パイシーズにいた頃、隊長が過保護なくらいに周囲の男どもに圧力をかけて守っていたせいか、エセルはどうも危機意識に欠けるところがある。

だから注意していれば勘づかれはあるまい、とタ力をくくつていたレグルスにとつて先ほどの言葉は衝撃だった。

『旅のわりと最初の方から。隠してるから知らんふりしてたけど、意味ないねこれ。つか、レグルスも男だし、禁欲主義でも何でもないんだから普通のことじやないの？』

いつも以上に感情の抜け落ちた、淡々とした口調。

言外に私は全く関係ないけど、と言い放つ態度に苛立ちを感じたレグルスは身勝手と責められるべきなのだろう。

それでもずっと続いているエセルへの苛立ちは増すばかりで。

正直に言えば、この時点で限界ギリギリだったのだ。

レグルスは昨日の午前中に迫つて来た宿屋の娘を抱いてはいない。あまりにも聞き苦しいエセルに対する罵詈雑言をあの娘が吐いたせいで。

腹立たしいことにレグルスは肩口に数か所、痕をつけられており、それでも抱いていないと主張することは説得力がなさすぎるので止めた。

他の街で女を抱いていたことは事実なのでいつそう白々しいからというのもある。

国境の森林地帯を越えるために街に来るのは久しぶりだった上に、発散しようと思つた矢先に止めたためレグルスの飢餓感は募つていった。

加えて、治療を受けている今は、暗殺者との戦闘を終えた後である。

戦闘がもたらす高揚感は理性を容易く突き崩す。

だから無意識のうちに、レグルスは考えないようにしていたのだ。シリウスがエセルに対して何かをしたのではないかという可能性を。

レグルスにとって、シリウスが女に対して性急に事を進めるという想像はしにくかったというのもある。昔からシリウスは何事にも冷静で、人に執着しないタイプだった。

理性の限界が近い、というのをレグルスは分かっていた。
嫌な可能性を考えないようにしていた。

エセルを見ないようにして欲望から目を逸らし続けた。

それでもエセルの指先が、背中に触れてやがて手当

てが終わつたのか離れていく。

レグルスは手当での完了を告げる声を待つた。

その声を合図に、彼女を見もせずに眠つてしまおつと思つていたからだ。

そうすれば、我慢できると、思つていた。

空いた間を不審に思つて振り返つてしまつたことが、最後の砦を破壊した。

エセルはレグルスと同じくベッドに腰掛けていた。

手当てが終わつてぼんやりしていたらしいエセルは、レグルスと目が合うと何故だか慌てて首を振るうとしたのだ。

結いきれない横髪がさらりと揺れて、左側の首筋が見えた。見えてしました。

耳の後ろ。柔らかな白い皮膚に散る、紅い痕が。

まるでこの女は既に自分のものになつたのだと主張しているよう

な、所有印が。

全身の血が沸騰したようだつた。

決壊した激情のままに、レグルスの身体は動いた。

気がつけば真下にあるのは愛おしい女の顔。

「答える。シリウスに何された」

喉の奥から獣の唸り声の「」とき低音がもれて、本当に口が野に生きる一匹の獣であったなら、とレグルスは思った。

寄り添つて眠る時、エセルに何度口づけよつと思つたか分からない。

けれど、そのたびに堪えた。
堪えるしかなかつた。

一度でも口づけてしまえば、我慢は利かない。
なし崩しに全てを奪いたくなるだらうから。

けれど自分以外の男がエセルにつけた痕を見れば、長年の我慢を嘲笑うように呆氣なく、理性は崩壊した。

本能のままの目線で見てみれば、エセルの怯えた顔はひどく扇情的に映る。

血の気の引いた白い頬も、小刻みに震える顎も……追い詰められた鹿みたいに怯えた瞳も。

こんなエセルの瞳を、レグルスは見たことがあった。

レグルスがバイシーズの軍に入つて間もない頃、一対一で向き合えばエセルは必ずこんな怯えた瞳で彼を見たのだ。

そのくせ隊長の傍にいる時だけは安堵の笑みを浮かべる。

何年も軍にいる内に流石にレグルスにも慣れて、そんな瞳を向かなくなつたので彼自身すっかり忘れていたのだ。

レグルスは瞬間的に笑いだしたくなつた。

隊長のように信頼を寄せられることなど、始めから無理な話だつたのだ、と。

（我慢して我慢して、それでいいたいどうなつた？……もういい。この女が未だに隊長のことを想つていようが、知つたことか）

凶暴な衝動そのままに、レグルスはエセルの脣に噛みついだ。

【抱えた理由、消える理由】（後書き）

補足事項

国に関する」とですが、監さんお察しの通り、星座の名前がついています。

パイシーズ……魚座（双魚宮）
ジエミー……双子座（双児宮）
サジタリアス……射手座（人馬西）
スコルピオン……蠍座（天蠍宮）

なお黄道十一星座と十一宮は違つものですが、このファンタジーな世界では空に浮かぶ星座と十一宮の領域はほぼ一致しているという設定です。

なので作中では人馬宮＝射手座のある領域、ヒイメージしてください。

各国は名を冠したそれぞれの星座から「加護をもじっています。

詳しくは作中でおいおい説明する予定ですが、今回の話が意味不明にならないことを祈つて補足しました。

心臓の真上

熱い。

自分がどうどうに溶けてなくなりそうに熱くて、訳が分からない。

唇がひりついて痛い。

レグルスが噛みついて、そのまま味わうみたいに口に含んだり舐めたりしたせいなのは分かる。

分からるのはそのあと。

美味しいわけないのに執拗に唇を味わわれて、呼吸も忘れていたのが悪かったのだろうか。

空気を求めて開けてしまった口に待ち構えていたかのようなタイミングで強引に舌が入り込んできて、呼吸が更に苦しくなった。

落ちつけ、私。

隊長も言つてたぢやないか。あせつた時こそ鼻からゅつくり息を吸い、膚の下で溜めてゆつくりと口から吐き出す。

…… 口から息を吐き出せません、隊長！

元同僚によつて塞がれています！

いやいやいやいや、落ちつけ。鼻から吸つて鼻から吐けばいいだけだ。

口を塞がれたら完全鼻呼吸すればいいじゃない。それで万事解決する。

いや、訳が分からない状況は何ひとつ解決しないけどね！

「……ん、う……っん」

口腔の奥からもれる自分の「めき声は、何だかひどく鼻にかかりていた。

当たり前じゃないか。息が苦しいんだ。

さつきから歯列をなぞつたり私の舌を抑え込んだりとレグルスの熱い舌が好き勝手してゐせいで。

思考が、溶かされてく。

訳が分からない。

レグルスが何でこんなことをするのか、訳が分からない。

ふいに奴の舌が口から出て行つて、ぼやけるほど近かつたレグルスの顔がクリアになる。

熱を孕んだ緑の双眸は、雨上がりの五月の森みたいに濡れたように光つっていた。

ああ、きれいだ。

レグルスは本当に、美しい瞳を持つてゐる。

溶けた思考で悠長にもそんなことを思つ。

さつきまで見下ろしていくレグルスの視線を怖いと感じていたといつのこと。

怯えを見せた瞬間に、レグルスが見せた肉食獣の笑みがとても恐ろしかつたのに。

…………内臓を食い散らされる運命にある草食獣の気持ちを味わつたといつのこと。

頭が痺れたように重くて、美しい緑をもつと見ていたかつた。

ぼんやりと見つめていると縁の双眸がとまどつたよつて見開かれて、数度瞬く。

何かを問いかける気配を瞳にたたえて、再びレグルスの顔が近付いてきた。

先ほどより幾分柔らかく、唇が重なる。

その熱に訳も分からぬ内に泣きたくなつた。

レグルスはゆつくりと口元からたどるように、私に熱を伝えていく。

口の端へ、頬へ、顎へ、喉へ。

喉元をくすぐる舌先に、首が弱い私は悲鳴をあげたのにそんなことは意に介さない。

傲慢なレグルスらしい強引さで、舐めたり甘噛みしたりする獣みたいな口づけを落としていく。

首筋を征服し終えると、次は肩へ。

いつのまにかシャツは肌蹴られていて、素肌の肩先にレグルスの堅く大きな手のひらを感じる。

正直、得体の知れない感覚が背筋に走りぬけていて、声を抑えようとするのに手一杯だ。

鎖骨を柔らかく噛んだ口が、私の身体の中心をたどるよつて下に降りて

唐突に、動きを止めた。

「「」の印は……」

かすれた声を出して、レグルスが触れたのは心臓の真上だった。
命を刻むリズムが脈打つ場所。

……………ん?

いやいやいやいや、待て待て待て待て。
ちょい待て、そこ胸だから。

どんなに薄くてもダイレクトに胸だから。

貧相な胸に対するコンプレックスは溶けていた思考を一瞬で引き戻して再構成してくれた。
上体をがばっと起こす。

起こせたのは、レグルスがもう肩や腕を抑えていなかつたためだ。
私はこれ以上、洗濯板と見まがうような胸を観察される前に、素晴らしい速度で後じさり、ベッド上で距離を取る。

レグルスを見やれば、先ほどとは全く違う瞳で呆然と私を見つめていた。

「その印は、いつからあった?」

「印?」

「心臓の上の……ジH///Iのアストロロジカルシンボルのことだ」

何ですかそれは。

かき寄せたシャツの隙間からちらりと見れば、盛り上がりにあまりにかかる胸に灰色の痣があった。

……文字か数字のよつな。砂時計に似てこるよつな形だ。

「ああ……そりこやひすらりと癒みたいのが三日前からあつたよ
うな……」

「三日ー? なんでそれを俺に早く言わない!」

「いや、でもこんなにはつきりした形のある感じじゃなかつたし。三
の稽古中にぶつけたのかなーとか思つてたから」

その言葉にレグルスは低く唸つた。

怒りは感じるけれど、さきまでの得体の知れない色氣のある雰
囲気とは違つ。

いつもの、自分に対しての苛立ちを噛み殺しているよつなレグル
スの表情に、場違いにもほつとしてしまひ。

訳の分からぬ熱のやり取りの理由を、問いただすことほ怖かつ
た。

苛立ちを鎮めようとしたのか、レグルスは一度目を閉じた。

そして私をその縁の瞳で射抜くと、いつにない真剣な声で言ひ。

「エセル。体の具合がおかしいとかないか? 嫌な夢を見るとか
「え? いや特に何も」

色々ありすぎて疲労困憊してはいるが、至つて健康だと思つ。
その気の抜けた返事に、レグルスは軽く息をついた。

とりあえず少し安堵したようだ。

そのまま腕を組んで、何やら思案していたが長くはからなかつ
た。

包帯の上から手早く上着を着て、ブーツの紐を結び直しながら宣
言していく。

……完全に出かける姿勢だ。

「Hセル。用意ができしだい、すぐにでも出発する」「…………はい？　え、でもまだ八日は滞在する予定で。宿にも前払いしてあるし」

「俺が早馬と食糧の調達をしてくるから、お前はここで寝てろ。体力の回復をしどけ」

「つて、レグルスの方が怪我人な上よっぽど疲れてると思うんだけど！？」

「馬鹿にすんな。問題ねえよ。……それより、お前のことだ」

耳に心地よい低い声が、更に一段トーンを下げる。
すっかり身支度を整えたレグルスがまだベッドの上で座り込んでいる私に近付いて、真剣な眼差しを向けてきた。
先ほどの熱が、一瞬ぶり返して身を引きかける。

「頼むから、逃げないでくれ。逃げられても仕方ねえ」としたのは俺だが、今は。……今は、お前の命が危ないんだ

「…………え？」

「ジHIIIの呪いはおどぎ話じゃねえ。王族の力自体が、伝説の存在つてわけじゃねえんだ。お前も見ただろ。あの暗殺者の小僧がサソリ操つてんのとか、ウサギがしゃべんのとか反則技な現象を」

まだ記憶に新しい大量の黒サソリが頭をよぎり、慌てて頷いた。

「胸の痣は、おそらく呪いの徵候だ。俺の力じゃ、お前を……」

言葉の最後はかすれて私の耳に届かなかつた。

ひどく悔しそうなレグルスの顔を見て、隊長にぼろぼろに打ち負かされた時よりも悔しそうだな、と呑気な感想が出てくる。

だつて、呪いとかぴんと来ない。

……いや、もしかしたら信じたくないだけかも知れないが。

「とにかく、すぐ準備してくる。お前は出発前に少しでも寝とけ」
「……出発するって、いつたいどこ?」

私たちは特にあてのない旅をしていたはずだ。

……自信がなくなってきたのは、レグルスに何らかの意図があってサジタリアスに来たのだろうってことが分かったから。

怪我を感じさせない俊敏な動きで部屋を出て行こうとしていた背
が止まる。

振り返りずに、レグルスは告げた。

「カウス・メディア。……この国の王都だ」

黄昏に見る悪夢

サジタリアス国王は、^{ちえ}智慧を司る人馬ケイロンの末裔。特に当代の国王陛下は傑物との噂がどどろいており、その類まれな手腕は国のですみずみにまで及んでいるという。

……ウサギなミーファを側室にしているお方だが。

いや、本来はミーファも人になれると信じてはいるんだけど、見たことないからイメージはウサギのまんまですよ。

ともかく、整備の行き届いた街道というのもサジタリアス国王陛下の賜物なわけで。

馬車のために敷かれた石畳は凹凸が少なく、街道沿いの宿場町には盗賊対策のために王都から警備隊が配置されているらしい。早馬をかつ飛ばしてゐる時、巡回中の騎士と何度もすれ違つたから、盗賊もこれじやあ割に合わないだろう。商人や旅人を狙あうものならすぐ連絡され、近場の宿場町から来た騎士にふるぼつてられることが確実だ。

そんな理由でサジタリアス国内の旅は楽に進む。

まあ距離が距離だから、交易都市サティラから王都カウス・メディアまで早馬で急ぎに急いで、七日といつといふらしこけど。

宿屋の看板娘の心底忌々しそうな舌打ち（レグルスにも向けられていた）を背に、出発してから早二日。

中間点にある大きな宿場町で、『それ』は起こつた。

*

*

*

旅人相手に商いをする店が立ち並ぶ通りは、人でごった返していた。

干し肉やドライフルーツを売る乾物屋、傷に効く軟膏をさかんに宣伝している薬種商、すでに出来上がった簡易な服も商っているらしい布屋。そういう旅の必需品を売る店の合間に、安い飯屋兼酒場が挟まれており、そちらの呼び込みは相当元氣でうるさいのが多い。

まだ夕暮れ時だがお早いことに酔っ払い共の笑い声が響いて来るから、それに負けないよう声を張り上げやるを得ないのである。

「……つたく、宿で休んでろつたのに……」

「やー、でも買い出しをまかせっきりにすると收まりが悪いというか何というか。レグルスが買つどいつも豪快な買い方で、無駄が出そうで嫌というか」

「どう考へても後のが本音じゃねえか」

ぎりり、と眼光鋭く睨まれば苦笑するしかない。

レグルスの放つ不機嫌オーラは雑踏を割れさせる作用があるので、歩くのが非常に楽だ。

今、大慌てで避けたそのお兄さん、気持ちはよく分かります。下手にぶつかつたら斬り殺されそうですからね！

「サディラでは買い物まかせたけどさ……干し肉ばつか多く買って、自分に本当に必要な傷薬とか買ってないっていう信じられなさだったからね……」

「深々と溜息はくな。あのぐらいの傷、もう痛みもねえよ」

「レグルス、その無意味に虚勢はる癖やめよう。傷口からの化膿が一番怖いのは、軍時代から分かつてることなの」

こればかりは田を合わせて真剣に言つ。

見上げるほど高い位置にある縁の田は、案の定、ますます不機嫌
そうに細められ……ふいつと逸らされるかと思ったのに、今回は氣
遣わしげな光を浮かべた。

「……それよりも、お前は何ともねえのか？」

思い出すだに顔から火が出そうな出来事以来、レグルスは二つ
つた問いを何度も繰り返している。

それに対する私の返事は、いつも同じ。

「何ともないって。健康そのもの。何なら今から的当ての賭けでも
しようか」

「…………あの印の色は、濃くなつたりしてないな？」

「変わんないよ。灰色のまんま」

嘘だった。

心臓の真上にある不気味な痣は、時間がたつごとに濃くなつてい
る気がする。

今はもう、黒に近いのではないだろうか。

何を隠そう、無意識に虚勢を張つてるのは私の方だった。

ここ数日、全方位を警戒している雰囲気のレグルスに、これ以上の
の負担をかけるのが嫌だったから。……違うか、自分のためだ。
口に出せば、黒い痣からしみ出た毒が全身を駆け廻る。
そんな予感がして、呪いを現実のものと認めるのが怖くて、逃げ
ているのだ。

痣と、恐怖心以外、呪いめいたものは今のところない。

平気だ、と笑つてさえいれば、まだ大丈夫な気がしていた。

それが何の根拠もない思い込みだと、すぐに思い知らされるとも知らずに。

* * *

ふと、何かを感じて横を向くと、一人の子どもが私を見ていた。雑踏をすり抜けて射抜いて来る視線に、思わず歩みが止まる。店と店の間、人が一人ようやく抜けられるような路地に立った子どもは、ひどく痩せた身体にボロボロの服をまとっていた。

戦災孤児？

いや、パイシーズと違つてサジタリアスは孤児院など福祉もきちんと行つていると聞いた。

浮浪児が全くいなとは言えないが、それでもあんな今にも死にそうなほど痩せこけた子どもがいたら助けてやるうといふ人がいるくらいには、この国は豊かだ。

この宿場町も整備された街のひとつで、旅人の活気に満ちて雑然としている割には治安も良さそうだというのに。

不自然さに、目が逸らせない。

子どもは、ざんばらに切つた焦げ茶の髪の隙間から、私だけをしつかと見つめている。

こけて落ちくぼんだ目も、髪と同じ暗い色。

煤で汚れた顔は男の子か女の子かも判然としない。

けれど子どもがニイツヒ、口の端をつり上げた瞬間。

耳元に宣言されたようにはつきりと、分かつてしまつた。

あれは、私だ。

私だつた。

11歳の時の、痩せこけて、死にかけていた時の、私。
隊長に拾われる直前の、拾われるのが一日遅かつたら飢え死にし
ていただろう私。

子どもの私はなぜか、弓を手にしていた。

長弓なんかではない。

村にいた頃、狩りに使つていた短弓。

父親からもらつたそれは、村が焼き滅ぼされた時に燃えてしまつ
たはずだつたのに。

子どもらしくもない、邪氣に満ちた笑みを浮かべながら、『私』
は矢をつがえた。

やけに禍々しく光る鎌は、真つ直ぐに私だけを狙つていて。

雜踏を行き交う人々は、薄い影だつた。

全てをすり抜けて、矢は私の右手を貫いた。

絶叫をあげたはずなのに、何も聞こえない。

夕暮れ時の赤いはずの空気が、やけに白くて。

全ての音が遠くて、無音の世界に閉じ込められたような現実感の
なさ。

それなのに、痛みだけは途方もなく鋭かつた。

顔をかばうように突き出したためか、矢は手のひらから甲へ貫通

している。

そう、認めると、ぐ、と吐き氣がした。

「う……あ、あ……つあ、うあ」

意味をなさないづめきが、喉からもれる。
痛い。

手のひら、矢を、うあ、抜かないと、でもどうすれば。

右の指を動かすと、飛び上がるほど激痛が走った。
声にならない絶叫を上げて、しゃがみこんだ所に、また矢が。

刺さる。

右の肩口を押されていた左手を、そのまま縫い止めよう。

刺さる。

左肩の、浅い位置に。

わざと、急所を外すよつた、狙い。

獲物を、いたぶつて、いる狙い方。

子どもの笑い声がする。

幼い『私』の声で「もつと刺さるよ」と。

「お前が射殺こじゆしてきた人間の数だけ、矢が刺さるよ」

楽しげに楽しげに、わらべ歌を口ずともよつて。

あまりの恐怖に、私は

「…………い、おいつ！ エセル！ 聞こえるか！」

レグルスの声が聞こえた瞬間、金色の光が私の中に流れ込んで来た。

冷たい鋭い痛みの艦を壊して、私の中へ。
温かな、まばゆいほどの金色の、力の奔流。

レグルスの、まとう生命力、そのものが。

「…………れぐ、るす？」

「エセル。俺が見えてるな？ 息は？ ……わりい、とにかく今は
ゆっくりと息をしろ。しゃべんのは落ちついでからだ、いいな？」

温かかった。

広い胸板が頬にあたつていて、レグルスの鼓動が聞こえた。
迷子になつた子どもを抱き締めるみたいに、もう見失うまといどばかりにしつかりと抱き締められて、温かい。

痛みの残滓^{ざんし}が、溶けて消えていく。

レグルスの大きな手のひらが頬をぬぐつて、そこでようやく、自分が涙を流していたことに気づいた。

「大丈夫か？」

「…………うん。…………さつきの、あれは、私は……」

「…………とにかく、場所を移動する。首の後ろに手えまわせ。しつかりつかまつてろ」

レグルスの腕が私の膝裏と腰を支えて、抱きあげた。

金色の光が離れていくと、またあの痛みが襲つてくる感覚がして、私は思わず首筋にしがみついてしまう。

そんな私をあやすように、レグルスは言つ。

「エセル。大丈夫だ。俺が触れていれば呪いは抑えられる」

「……レグルス、私は、どうなつてた、の」

「お前は突然、真っ青になつて倒れた。……何を、見た？」

「……子どもの、頃の私が。私に矢を……痛みが。とても、痛くて

……」

「分かった。悪かった。それ以上言わなくていい。……それ以上、思い出すな」

自分が斬りつけられたみたいなレグルスの声に、心臓がぎゅっと縮む。

痛みを、伝染させたいわけじゃない。

苦しまないでほしい。

「印の色はもう……黒いんだな？」

「……うん。ごめん」

「謝んな。……俺がわりいんだ。お前に全部話すのが嫌で、そのくせまだ灰色なら大丈夫だと思ったがった、俺が」

雑踏のざわめきも徐々に遠くなつて、私たちに沈黙が降りた。

濃くなつていく夜氣の中、レグルスの温もりにすがつている自分に気づく。

いや、それはもうずっと、前から。

追放された直後から、私はこの熱にすがり続けていた。

他の女を見ないでほしいなんて、そんな思いすら表に出せないほど、レグルスが離れて行くことが、怖くて。

こいつのまにか宿屋の部屋で、私は柔らかくベッドに下ろされた。しがみついていた腕を離すと、レグルスは手を握ってくれた。

「あれは、ジエリーネの呪いなの?」

「ああ、そうだ。呪いが発症すると幻覚を見る。……お前が見たものは、全てまやかしだ」

「……なんだか、すうじて眠る……」

「寝てる。俺が傍にいる。悪夢など追い払ってやるから、安心して」

繋いだ手のひらから、じんわりと金色の熱が流れ込んでくるのが分かる。

不思議と、ずっとずっと前から、この光に守られてきた気がして、ひどく安心できて、ひどく眠い。

痛めつけられた精神が、休息を欲するよう。

私の意識は、夢も見ない深い深い淵に吸い込まれていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7980w/>

星を射落とす日

2011年11月12日23時44分発行